

三光村の遺跡

三光村文化財調査報告書(第4集)

瑞雲遺跡

成恒笹原遺跡

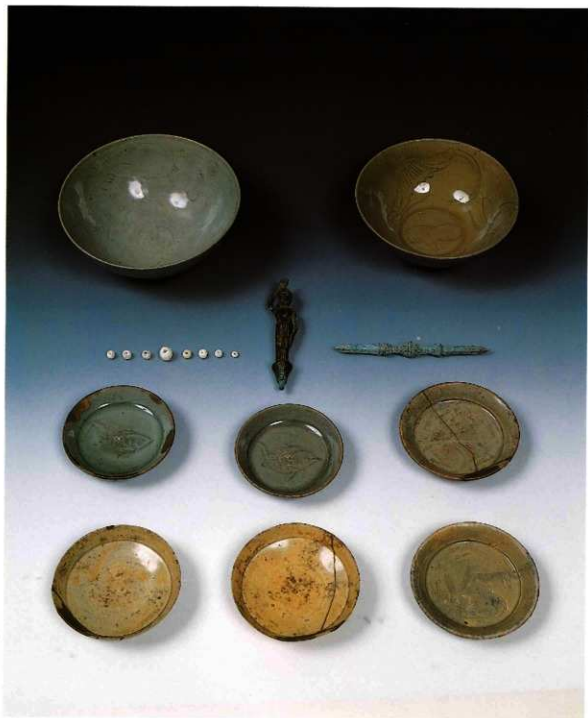
2003.3

大分県

三光村教育委員会



八面山から見た瑞雲遺跡・成恒笹原遺跡



県指定有形文化財 瑞雲寺遺跡出土遺物

発刊によせて

豊かな風土と自然に恵まれた本村は、国指定の名勝耶馬溪・八面山をはじめ、各種の文化財、天然記念物等が各地に分布していますが、郷土の先人たちが、長い歴史の中で築いてこられたこれらの文化財の保護体制を、充実強化する必要を感じています。

県下では約4,000箇所に及ぶ埋蔵文化財の包蔵地が知られていますが、本村もこれらの遺跡については、その計画的な調査とその保護、そして開発事業の調整をも図ってきました。

こうした中で、今回は「成恒笹原遺跡」の調査を行いました。これは村の総合グラウンド及び福祉センターの建設に伴うもので、調査の結果、1基の祭祀土坑が確認されました。この土坑からは300点あまりのミニチュア土器が検出され、その数は全国的にも極めて珍しい出土量であります。その土器は、時代は4世紀後半から5世紀初頭と考えられます。

また、「瑞雲遺跡」については、平成8年度と14年度の2カ年にわたって調査を行いました。この遺跡は磐座と呼ばれる遺跡で、3つの巨石を立ててL型に配し、前に1つの巨石を寝せて配しています。これはかなり長い間、祭祀場として機能していたことが考えられます。

また、県指定有形文化財に指定されています瑞雲寺遺跡出土遺物は、この磐座から出土したのではないかと考えられます。

上記2つの遺跡は、成恒小池のすぐそばで確認され、水に対する信仰遺跡であります。

前述の磐座遺跡も、代々水に対する祭祀が行われていたと考えられます。

今後は、これらの調査結果を記録・保存し、公開することで郷土の文化財に対する理解を深め、その愛護の高揚を図ることに努めていかなければなりません。

終わりに、これらの調査にあたって、ご指導を頂いた県教育庁文化課の方、また、ご協力を頂いた村文化財調査委員の方々に深く感謝申し上げます。発刊のことばといたします。

三光村教育委員会

教育長 西 義一郎

例 言

1. 本書は三光村教育委員会が、平成8年度と14年度に緊急発掘調査を実施した瑞雲遺跡と、平成6年度に緊急発掘調査を実施した成恒笹原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、大分県教育庁文化課指導のもと平田由美（三光村教育委員会）が行った。
3. 遺情実測は主に平田が行い、一部村上久和（大分県立歴史博物館）氏、長谷川正美氏の協力を得た。
また遺物実測及びトレースについては、瑞雲遺跡については平田が行い、成恒笹原遺跡については（有）雅企画にお願いした。
4. 遺構写真は調査担当者のほか、長谷川氏の協力を得た。また遺物写真は、瑞雲遺跡については長谷川氏の協力を得た。成恒笹原遺跡については（有）雅企画にお願いした。
また、瑞雲遺跡の空中写真は（株）写測エンジニアリングにお願いした。
5. 出土遺物の整理は主に、三光村教育委員会で行った。
6. 本書の執筆・編集は、平田が行った。

本文目次

第1章	はじめに	
	1. 調査の経過	1
	2. 位置と環境	2
第2章	調査の内容	
	1. 瑞雲遺跡	4
	2. 成恒笹原遺跡	12
第3章	まとめ	60

挿図目次

第1図	三光村内遺跡分布図	3
第2図	瑞雲遺跡位置図	4
第3図	瑞雲遺跡出土土器実測図(1)	4
第4図	" (2)	5
第5図	瑞雲遺跡平・断面図及び土層図	6
第6図	成恒笹原遺跡位置図	12
第7図	SK1平・断面図	12
第8図～第12図	成恒笹原遺跡出土土器実測図	13
第13図～第17図	"	14
第18図～第22図	"	15
第23図～第28図	"	16
第29図～第34図	"	17

第 35 图~第 39 图	成恒征原遗址出土石器夹器图	1 8
第 40 图~第 44 图	"	1 9
第 45 图~第 49 图	"	2 0
第 50 图~第 54 图	"	2 1
第 55 图~第 60 图	"	2 2
第 61 图~第 66 图	"	2 3
第 67 图~第 73 图	"	2 4
第 74 图~第 79 图	"	2 5
第 80 图~第 86 图	"	2 6
第 87 图~第 92 图	"	2 7
第 93 图~第 98 图	"	2 8
第 99 图~第 103 图	"	2 9
第 104 图~第 109 图	"	3 0
第 110 图~第 116 图	"	3 1
第 117 图~第 122 图	"	3 2
第 123 图~第 126 图	"	3 3
第 127 图~第 133 图	"	3 4
第 134 图~第 139 图	"	3 5
第 140 图~第 146 图	"	3 6
第 147 图~第 152 图	"	3 7
第 153 图~第 158 图	"	3 8
第 159 图~第 165 图	"	3 9
第 166 图~第 171 图	"	4 0
第 172 图~第 177 图	"	4 1
第 178 图~第 184 图	"	4 2
第 185 图~第 191 图	"	4 3
第 192 图~第 197 图	"	4 4
第 198 图~第 204 图	"	4 5
第 205 图~第 210 图	"	4 6
第 211 图~第 217 图	"	4 7
第 218 图~第 223 图	"	4 8
第 224 图~第 229 图	"	4 9
第 230 图~第 236 图	"	5 0
第 237 图~第 243 图	"	5 1
第 244 图~第 250 图	"	5 2
第 251 图~第 257 图	"	5 3
第 258 图~第 264 图	"	5 4
第 265 图~第 270 图	"	5 5
第 271 图~第 277 图	"	5 6
第 278 图~第 284 图	"	5 7
第 285 图~第 289 图	"	5 8

写真目次

巻頭1	八面山から見た瑞雲遺跡・成恒笹原遺跡	
巻頭2	県指定有形文化財 瑞雲寺遺跡出土遺物	
瑞雲遺跡遺景(空撮)		7
#	全景	7
#	遺物山上状況	8
#	遺構東側から	8
#	遺構全景	8
#	遺構北側	9
#	遺構西側	9
#	遺構南西側	9
#	遺構東側巨石下石積状況	10
#	遺構北東側裏込石状況	10
#	第1トレンチ十層	10
#	出土遺物	11
成恒笹原遺跡SK1出土遺物		13
#		15
#		16
#		17
#		18
#		19
#		20
#		21
#		22
#		23
#		24
#		25
#		26
#		27
#		28
#		29
#		30
#		31
#		32
#		33
#		34
#		35
#		36
#		37

成恒佐原遺跡SK1出土遺物	38
#	39
#	40
#	41
#	42
#	43
#	44
#	45
#	46
#	47
#	48
#	49
#	50
#	51
#	52
#	53
#	54
#	55
#	56
#	57
#	58
成恒佐原遺跡遺構全景	59
# 遺物出土狀況	59
#	59

第1章 はじめに

1. 調査の経過

三光村では平成5年より村のほぼ中央に所在する成恒地区に、総合グラウンドの建設、また三光村立山口保育園の建設等大規模な開発が予定されていた。村教育委員会は、当該地区は庵ノ尾横穴墓群等が所在する周知遺跡であり、また県指定有形文化財になっている瑞雲寺遺跡出土遺物が発見されたと考えられる地区であることから、開発の予定されている地区全体を対象として、現地調査及び試掘調査を行った。その結果、開発範囲には横穴墓は所在しないことが判明したが、開発地横の池の湧水に1基の土壘、また1基の竪穴状遺構を確認した。協議の結果、開発計画との関係上、土壘については保存することが非常に困難であるとの結論に達し、調査に着手することとした。竪穴状遺構については、その性格が現状ではわからないということで、試掘調査を実施し、遺跡の内容を確認することとした。この遺構については調査を2ヵ年に分けて行うこととし、調査後は周辺にある自然公園の一部として保存することとした。

調査の関係者は以下のとおりである。

調査主体者	三光村教育委員会
調査責任者	花崎貞雄(三光村教育長 平成5年4月～平成11年2月)
	西義一郎(# 平成11年3月～)
調査指導員	賀川光夫(故人)
調査員	平田由美(三光村教育委員会)

調査には下記の人々があつた。

藤野武志・相良久馬・相良スナミ・松尾初枝・相良トメ子・相良ノブ子・高畑キヨカ・川野ヨシ子・大霜豊子・清城玉美・清城君子・上永紀代子・佐々木貞子・酒井勝代・前田千恵子・釘丸雪子

整理作業には下記の人々があつた。

土橋厚子・乙呷里美

2. 位置と環境

三光村は大阪府の北端にあって、村の西側には樞岡県との境となる一級河川山国川が悠々と流れ、周防灘へと注いでいる。また村の南側には村のシンボルである、標高 659 m の八面山がひかえ、中津平野に向かっていくつかの低い丘陵を形成している。またその裾部は開析谷によって開けている。三光村の現在の人口は約 5,600 人、世帯数は約 1,800 戸を数えるが、近年住宅等の建設により、人口は少しづつであるが増えている。

三光村内に所在する遺跡は現在までに確認されているだけで、かなりの数にのぼり、それらの遺跡の多くは、山国川から延びる低位丘陵及び山国川をはじめとした川の周辺に広がる平野部とに所在している。幸いにも遺跡の多くは、現在まで開発による破壊を免れており、村内は遺跡の宝庫である。しかし開発の波は確実に押し寄せてきており、本格的な発掘調査が行われることも多くなってきた。それによって村内の遺跡の様子も分かってきている。

第 1 図は三光村内に所在する遺跡の分布図である。村の北側には平成元年に調査が行われた佐知遺跡、平成 4 年度と平成 10 年度に調査が行われた佐知久保畑遺跡がある。これらの遺跡は山国川の河岸段丘上に所在しており、縄文時代から古墳時代までの複合遺跡となっている。特に佐知久保畑遺跡は、隣接して所在する上ノ原横穴墓群に埋葬された人々の生活していた集落として、注目される。

山国川沿いには城の百穴横穴墓群が所在している。この遺跡は山国川を見下ろす西斜面に造営されており、現在約 20 基を数えることができる。周辺にはまだ横穴墓が存在するものと思われ、開口している 1 基は、天井部を扇根型に造りだしている。この遺跡の周辺には白木古墳群が所在しており、この遺跡は白木台地の上、小袋谷を見下ろす場所に 4 基築造されている。これらの古墳は、4 基ともすでに開口している。

この白木の台地を北東側に行くと、藤山遺跡が所在している。特に藤山遺跡 C 地区は、平成 3 年に調査が行われ、この調査で 9 基の石蓋土壇墓が確認されている。

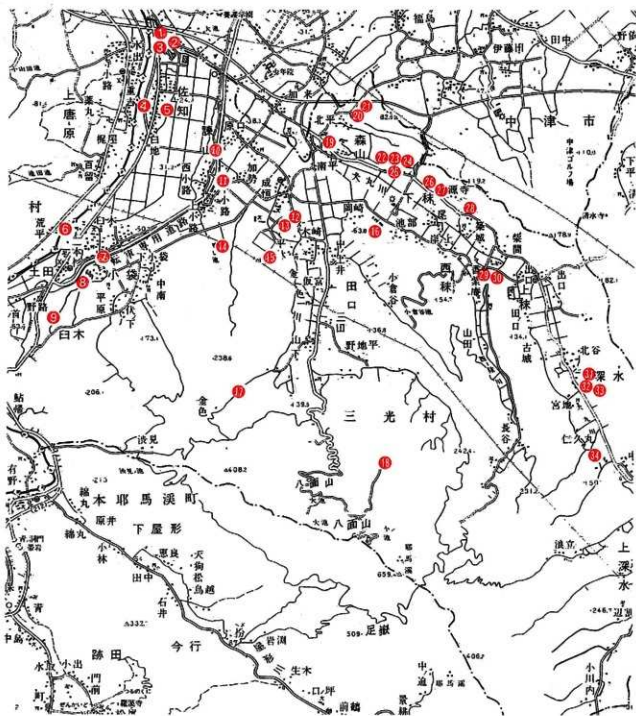
村の北西側の丘陵には、多くの横穴墓群が所在している。そのほとんどはすでに開口しており、開口部はそのほとんどが南西側を向いている。またこの丘陵頂部には、6 基の古墳が所在している。なかでも平成 2 年に調査が行われた倉迫ツツ塚古墳の 2 号墳は、墳丘規模が最大で 16 m を測る。またすでに大井石は取り除かれていたが、遺物等の保存状態はよく、7 世紀初頭の須恵器、勾玉等を確認することができた。

また、村のほぼ中心部には 8 世紀後半に建立されたと思われる、塔ノ熊炭寺が所在している。この遺跡は平成元年から平成 3 年にかけて調査が行われ、多くの瓦とともに、瓦塔・土器が確認された。この寺院は新羅系の軒先丸瓦を使用しており、山国川を挟んで対岸にある薬上郡新古宮町の垂水廃寺から出土した軒先丸瓦と非常によく似た作りとなっている。

村の東側には中世の山城や集落跡の遺跡であるズリヤネ城跡や、下深水小路遺跡等がある。また、付近には県指定有形文化財が出土した深水邸埋納遺跡がある。この遺跡は偶然発見されたもので、大甕の中に小皿をはじめとして、五徳、古銭等が納められていた。

また、村の中央部南側には八面山が所在し、山頂には八面山頂祭祀遺跡が所在する。多くの巨石の下には祭祀に使用したであろう土器が、多く確認されている。しかし本格的な調査はまだ行われておらず、遺跡は手付かずのまま所在している。

以上のように三光村は多くの遺跡が所在する遺跡の宝庫である。しかし、東九州自動車道や、日田中津道路の建設、またそれに伴うインターチェンジの建設等、村を 4 分割するような計画がある。工事に先立って行われる発掘調査で、遺跡の全貌が確認されるのはいいことであるかも知れないが、それらの遺跡のいくつかは確実に失われていくのは、非常に残念なことでもある。



第1図 三光村内遺跡分布図 (S = 1/50,000)

1. 上ノ原横穴墓群 2. 上ノ原平原遺跡 3. 佐知久保畑遺跡 4. 佐知遺跡 5. 佐知柿木遺跡
6. 城の百穴横穴墓群 7. 臼木古墳群 8. 外國遺跡 9. 臼木上ノ原遺跡 10. 諫山遺跡 A.B.C 地区
11. 諫山糸水遺跡 12. 瑞雲遺跡 13. 成恒笹原遺跡 14. 鴨山横穴墓群 15. 庵ノ尾横穴墓群
16. 岡崎遺跡 17. 妙見宮祭祀遺跡 18. 八面山山頂祭祀遺跡 19. 洗添横穴墓群 20. 北平横穴墓群
21. 森山遺跡 22. 美濃尾遺跡 23. 倉迫平古墳 24. 倉迫二ツ塚古墳 25. 野辺田横穴墓群
26. 三塚古墳 27. 天神原横穴墓群 28. 大源寺横穴墓群 29. 塔ノ熊窯跡 30. 塔ノ熊廃寺
31. ブリヤネ城跡 32. 深水邸埋納遺跡 33. 下深水小路遺跡 34. 爰迫遺跡

第2章 調査の内容

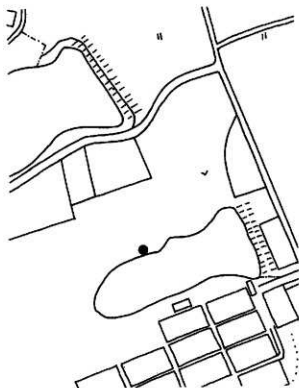
1. 瑞雲遺跡

遺跡は、三光村大字成恒に位置する。調査対象面積は約30㎡である。調査は遺跡の性格上、全て手作業で行った。調査は平成8年度と平成14年度の2回にわたって行われ、調査の結果、4つの巨石と多くの遺物を確認することができた。

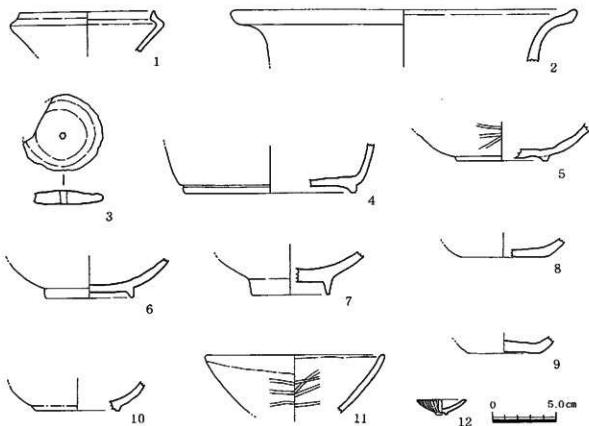
遺構は、3つの巨石をI字型に立てた状態で配置しており、またその前面には1つの巨石をねせた状態で配している。遺物の多くは、4つの巨石に囲まれた中央部から出土している。

調査はまず表面の土を除去することから始めた。次にトレンチを設定し、土層を調査することで石がどのように置かれているのか、確認を行った。

第1トレンチは、3つの立石の中の中央の立石の北側に設定した。その結果、この地形の基盤となる極めて硬い地山土と立石の間には10-15cm程の隙間があり、その中にはこぶし大の石が混入した、比較的やわらかい土が入っていることが確認された。第2トレンチは同じ立石の東側に設定した。このトレンチでも、



第2図 瑞雲遺跡位置図(S=1/3,000)

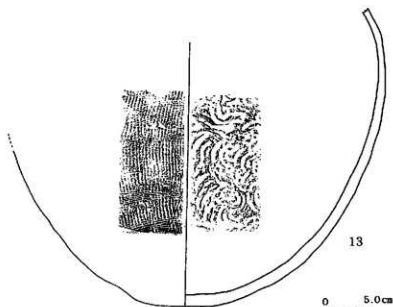


第3図 瑞雲遺跡出土土器実測図(1)(S=1/3)

基盤となる極めて硬い地山土と立石の間には、やや硬めの地山の二次堆積土が確認された。第3トレンチは、東側の立石の南側に設定した。調査の結果、このトレンチでは立石の下にもうひとつ石を確認した。この石を立石の下に配することで、立石の上部のレベルがほぼ水平に保たれている。また、配した石の下の土層を確認すると、地山土の混ざったやや硬めの土と、やわらかめの土とを交互に版築状に成形していることが確認された。第4トレンチは、西側の立石の西側に設定した。ここでも立石と地山土の間にはやや硬めの地山の二次堆積土が確認された。

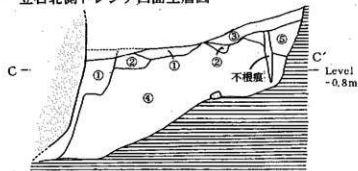
出土遺物(第3図・第4図)

1は蓋で、復元口径 10.6cm を測る。色調は内外面ともに青灰色で、焼成は良好である。調整方法は、内面から外面の口縁部下までヨコナデで、その下は回転ヘラケズリである。時代は8世紀末から9世紀初頭を考える。2は甕で、復元口径は28.0cmを測る。色調は内外面ともに暗茶褐色で、一部濃灰色である。焼成は良好である。調整方法は内外面ともに、ヨコナデである。時代は8世紀から9世紀を考える。3は鉢状の土製品で、径は6.0cmを測る。色調は赤褐色で、焼成は良好である。全体的にナデによる調整を行っている。時代は7世紀から8世紀を考える。4は埴で、底径は13.4cmを測る。色調は内外面ともに灰褐色で、焼成は良好である。調整方法は、内外面ともにナデである。時代は8世紀末から9世紀初頭を考える。5は埴で、底径は7.1cmを測る。色調は内外面ともに灰色で、焼成は良好である。調整方法は、内外面ともにナデ後ミガキで、底部は指ナデである。一部未調整のところもある。時代は11世紀から12世紀初頭を考える。6は埴で、底径は6.8cmを測る。色調内面は黒色である。外面は黄褐色で、一部黒色である。焼成はやや良好である。調整方法は内外面ともにナデである。時代は12世紀を考える。7は白磁場で、高台径6.2cmを測る。色調は内外面ともに淡黄緑褐色で、焼成は良好である。調整方法は、全体的に軸がかかっており、底部は回転ケズリである。時代は12世紀を考える。8は土師皿で、底径は6.7cmを測る。色調は内外面ともに赤黄褐色で、焼成はやや良好である。調整方法は内面が回転ナデである。外面上半部はナデで、下半部はヘラキリである。また一部にヘラ状工具によるキズがある。時代は12世紀から13世紀を考える。9は土師皿で、復元底径は5.6cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色で、焼成はやや甘い。調整方法は、内外面ともにナデで、底部は承切り痕が残っている。時代は12世紀から13世紀を考える。10は埴で、底径は約6.6cmを測る。色調は内外面ともに灰茶褐色で、焼成はやや甘い。全体的に摩滅が激しいが、調整方法は、内面が指オサエ後ナデで、外面はヨコナデである。時代は12世紀末から13世紀を考える。11は瓦器埴で、口径14.2cmを測る。色調は内外面ともに灰褐色で、口縁部は濃灰色である。焼成は良好である。調整方法は、内外面ともにヘラケズリである。時代は13世紀を考える。12は江戸時代の紅皿で、口径4.0cm、底径1.0cm、器高1.2cmを測る。色調は内外面ともに淡青緑色で、外面の一部は白褐色である。焼成は良好である。調整方法は、全体的に軸がかかっており、底部は指オサエである。13は甕で、底部から胴部にかけて残存している。内面は同心円のタタキ目が残っており、外面は格子目状タタキである。2の甕の口縁部と同一個体と思われる。

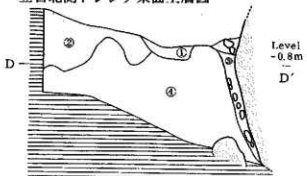


第4図 瑞雲遺跡出土土器実測図(2) (S=1/4)

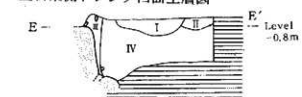
立石北側トレンチ西面土層図



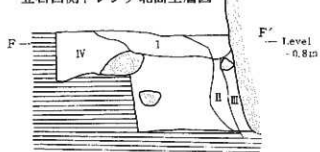
立石北側トレンチ東面土層図



立石東側トレンチ西面土層図



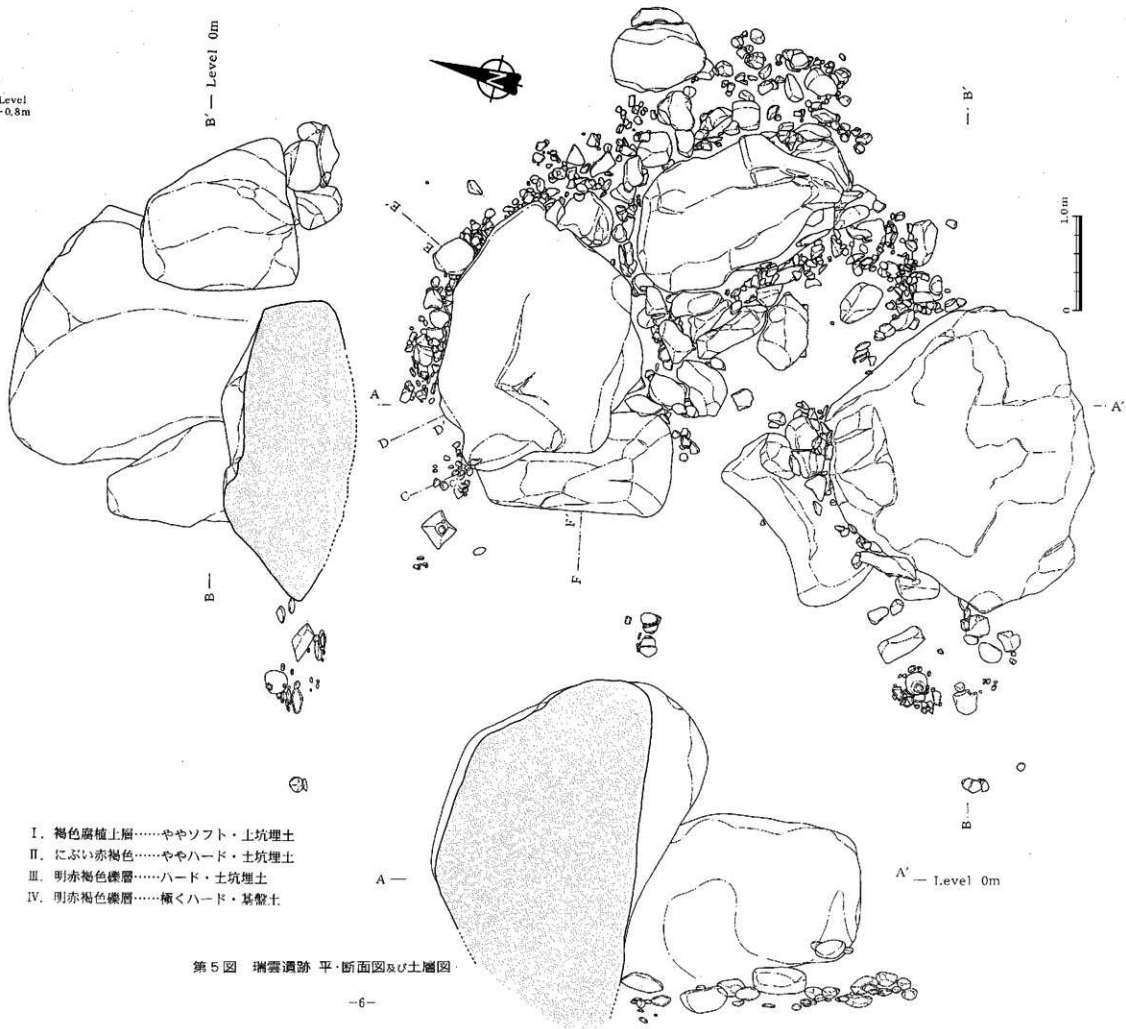
立石西側トレンチ北面土層図



- ① 褐色粘質土……ややソフト・土坑埋土
- ② 明赤褐色粘質土……ややソフト・地山の漸位層
- ③ 明赤褐色礫層……ハード・土坑埋土
- ④ 明赤褐色礫層……極くハード・基盤土
- ⑤ 明赤褐色粘質土……ややソフト・地山の風化土

- I. 褐色腐植土層……ややソフト・土坑埋土
- II. にぶい赤褐色……ややハード・土坑埋土
- III. 明赤褐色礫層……ハード・土坑埋土
- IV. 明赤褐色礫層……極くハード・基盤土

第5図 瑞雲遺跡 平・断面図及び土層図





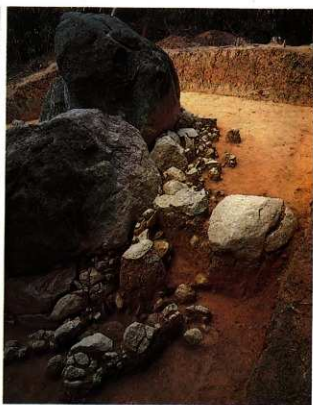
瑞雲遺跡遠景(空撮)



瑞雲遺跡全景



遺物出土状況



遺構東側から



遺構全景



遺構北側



遺構西側



遺構南西側



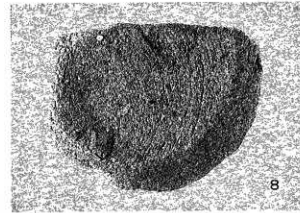
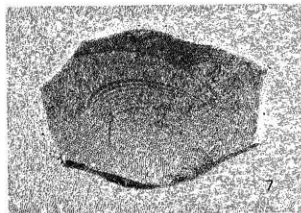
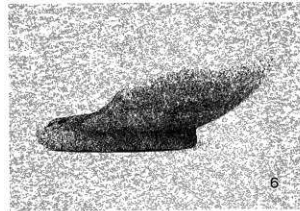
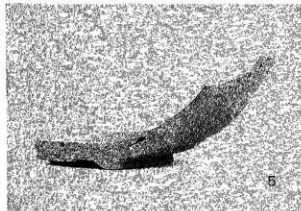
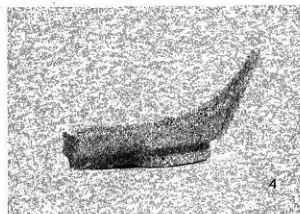
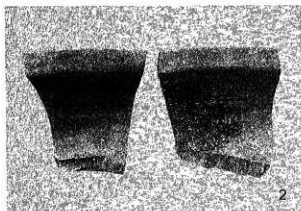
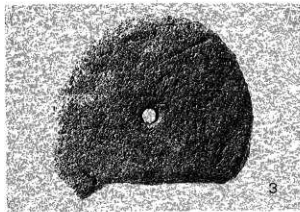
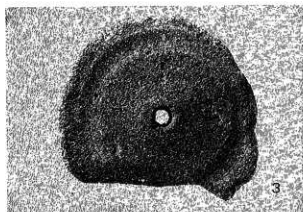
遺構東側巨石下石積状況



遺構北東側裏込石状況



第1トレンチ土層



瑞雲遺跡出土遺物

2. 成恒笹原遺跡

遺跡は三光村大字成恒に位置する。調査は三光村総合グラウンドの建設に伴って行われたものである。遺跡は標高約 43 m のやや小高い丘陵の頂部からやや東側の斜面に位置する。遺構は 1 基の土坑を確認したのみである。

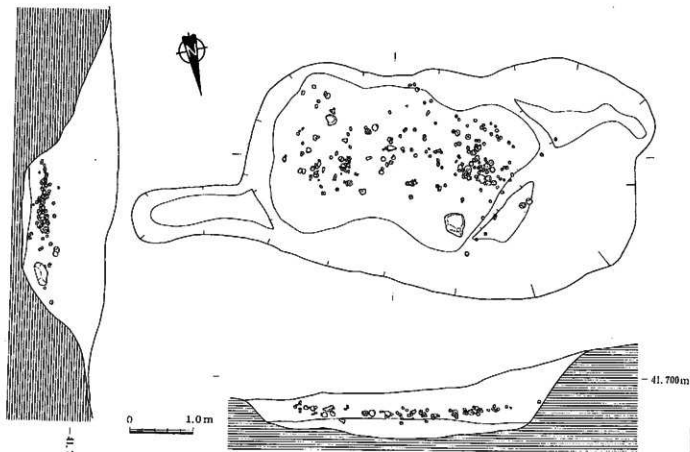
土坑は東西幅約 8.0m、南北幅約 4.0m、深さは最も深いところで約 1.0 m を測る。また土坑床面は、ほぼ平らである。土坑埋土上層は粗い地山土が混ざった土であるが、下層になるにしたがってキメの細かい土へと変わる。更に最下層部分では、真砂土状の土になる。

この土坑からは約 300 点ほどの土器が出土しているが、その大部分はいわゆるミニチュア土器である。土器は一括して、丘陵頂部から土坑へ、埋納されたような状態で出土している。土器の出土レベルであるが、大部分は土坑床面の上に積み重なるようにして出土しているが、出土土器の下のほうでは、最下層部分の真砂土状の上に刺さるようにして出土している。

この土坑の周辺には、この土坑以外特に遺構は検出されていない。また土坑は池の湧水につくられており、当時何らかの祭祀が行われたことをうかがわせる。



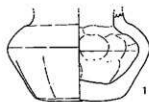
第 6 図 成恒笹原遺跡位置図 (S=1/3,000)



第 7 図 SK1 平・断面図 (S=1/60)

出土遺物（第8図～第289図）……（S=1/2）

1（第8図）は壺で、残存器高は4.5cm、底径は4.6cmを測る。色調外面は褐色で、一部暗黄褐色と暗褐色である。内面は明黄褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面上部はナデで、頸部には11緑部分をつまんで横にナデたようなくぼみが、強く残っている。下半部は、板状工具によって面取りするように押さえた後、ナデている。底部は、指オサエ後ナデている。内面上半部は指オサエで、特に肩部内面に強く指圧痕が残っている。下半部は指によるナデである。底部はナデと指オサエで、一部に強く指圧痕が残っている。



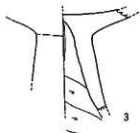
第8図

2（第9図）は残存器高、3.5cmを測る。色調外面は明黄褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。内面は明黄褐色で、一部褐色である。胎土は雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデしており、一部に何らかの工具による擦過痕が残っている。内面肩部は、横方向からやや上方向へ粘土を引き上げたナデで、一部ナデ後、指で押さえている。底部には指圧痕が強く残っている。

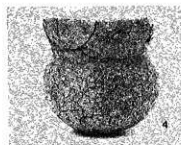
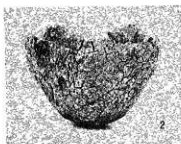


第9図

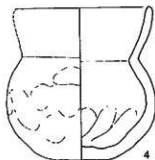
3（第10図）は高杯の脚部である。色調外面は淡黄褐色、内面は黄褐色である。胎土は石英・角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は杯部分にナデがみられるが、器面の剥落が激しく、詳しい調整は不明である。内面は、柱状部にシボリ痕と、工具によるナデ（回転ヘラケズリ）が見られる。



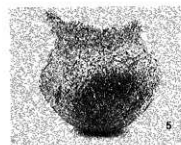
第10図



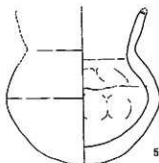
4（第11図）は壺で、復元口径は7.2cm、器高8.0cm、底径2.7cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色と明黄褐色である。胎土は角閃石・石英・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は胴部が指オサエ後ナデで、口縁部はナデである。内面は、下半部が指ナデで、一部には指オサエも残っている。上半部はナデで、口縁部はヨコナデである。また底部中央部には、指オサエでできた未調整の粘土の盛り上がりがある。



第11図



5（第12図）は壺で、復元口径は6.9cm、器高は8.1cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。また、黒斑がみられる。内面は明黄褐色である。胎土は石英・白色粒・角閃石を含んでいる。また焼成は不良である。調整方法は、



第12図

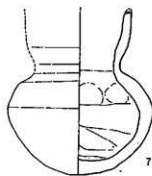
外面は器面荒れの為判別しにくい、ナデと思われる。内面胴部は、下半部がナデで、上半部が指オサエと一部指ナデによる調整である。また内面胴部には粘土紐接合痕が残っている。口縁部は器面荒れの為判別しにくい、ナデと思われる。

6 (第13図) は器種は不明である。残存器高は 3.3 cm、底径は 6.3 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデている。内面は指オサエ後ナデており、一部には強いナデを施している。



第13図

7 (第14図) は甕で、口径は 5.8 cm、器高は 8.7 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。また黒斑がみられる。内面は黄褐色で、一部明黄褐色である。胎土は石英・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ等で成形した後、ナデている。内面は口縁部から頸部にかけてはナデで、その下に強く指圧痕が残っている。また、胴部一番膨らんだ部分は、横方向の指ナデである。下半部は何らかの工具によるナデと思われ、深い擦過痕が残っている。全体的に成形時の指オサエが残っており、特に頸部には外と内を強くつまんで成形したあとが、顕著に残っている。



第14図

8 (第15図) は残存器高、3.1 cm を測る。色調外面は黄褐色で、内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法であるが、内外ともに器面はほぼ剥落しており、詳しい調整は不明である。ただ残った凹凸から見ると、外面は指オサエで、内面は指ナデを施していると思われる。また成形時の指圧痕が、わずかに残っている。



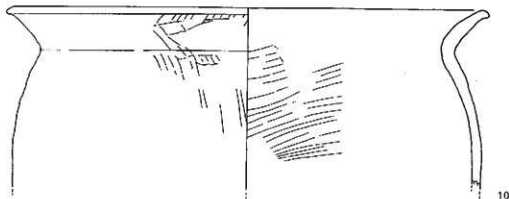
第15図

9 (第16図) は残存器高、4.0 cm を測る。色調外面は明褐色で、一部褐色である。内面は褐色で、一部明褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデである。全体的に、成形時の指圧痕が強く残っている。



第16図

10 (第17図) は甕で、口径は 25.0 cm、残存器高は 9.2 cm を測る。色調外面は黄褐色で、内面は黄褐色である。胎土は石英・長石を含んでいる。



第17図

また、焼成は不良である。調整方法は、外面の口縁端部はナデである。口縁下部分はヨコナデと、一部にハケ目がみられる。また胴部上半部にはハケ目がみられる。しかし器面の剥落が激しく、判別はしにくい。内面は、口縁部は指オサエ後ナデがみられ、胴部上半部には横方向のハケ目がみられる。また下半部分はタテ方向に、ハケ目による調整を施している。

11 (第18回) は甕で、残存器高は 3.5 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため調整は不明であるが、一部残る部分から見ると、指オサエを施していると思われる。内面は、下から上へ引き上げるような指ナデである。また口縁部はつまみあげ、頸部の稜を強く作っている。胴部上半部には、一ヶ所指圧痕が強く残っている。これは成形後土器を移動する際、強くつまんだためついたものと考えられる。

12 (第19回) は坩で、残存器高は 4.0 cm、底径は 4.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部ススが付着している。内面は暗褐色で、一部褐色である。胎土は石英・雲母・長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面胴部は、指オサエ後ナデである。胴部の下部は、ヨコ方向のナデである。また底部は、下に押し付けるようにして成形している。内面上半部分は、ヨコ方向の指ナデで、指を回すようにして成形している。下半部から底部にかけてはタテ方向の指ナデで、下から上へ引き上げるようにナデている。

13 (第20回) は壺と思われ、残存器高は 4.1 cm を測る。色調外面は褐色で、一部暗褐色である。内面は黒褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部は、つまみあげて成形した際の指圧痕が残っている。内面は、下から上へ引き上げるような指ナデで、底部には一部指オサエが残っている。また縦方向に粘土を重ねた痕がみられる。全体的に成形時の指圧痕が強く残っている。

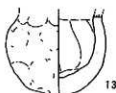
14 (第21回) は高杯の脚部で、残存器高は 7.7 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部黄褐色である。内面は黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は赤褐色粒・雲母・角閃石を含んでいる。また焼成は不良である。調整方法は、内外面とも器面荒れの為、調整はほとんど



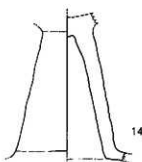
第18回



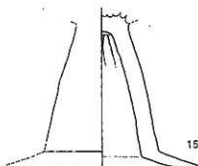
第19回



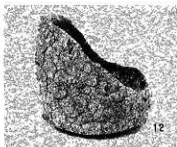
第20回



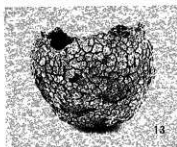
第21回



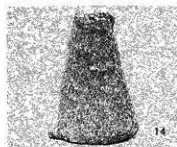
第22回



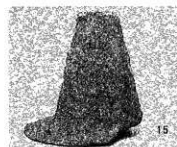
12



13



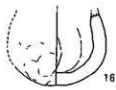
14



15

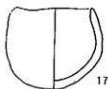
ど不明である。ただ内面の上部には、シボリ痕と思われる痕が見られる。

15 (第22図) は高杯の脚部で、残存器高は 7.5 cm、底径は 10.2 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は黄褐色で、一部明黄褐色と黒褐色である。胎土は赤褐色粒・雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい、ナデと思われる。内面も器面荒れの為判別しにくい、指部がナデで、柱状部はケズリ、上半部にはシボリ痕がわずかに残っている。また杯部との接合部分は、未調整と思われる。



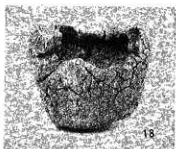
第22図

16 (第23図) は壺で、残存器高は 3.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒・砂礫を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデている。内面脚部は下から上へ粘土を引き上げた指ナデで、一部には指斥痕が強く残っている。また底部は指で強く押し込めている。



第23図

17 (第24図) は埴で、復元口径は 3.8 cm、器高は 4.3 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗褐色と褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデている。内面はナデで、口縁部は軽くつまんでいる。また成形後、口縁部を強く左右に引っ張ったためか、器形は上半部がゆがんでいる。

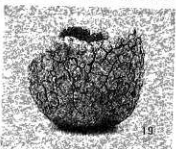


第24図

18 (第25図) は埴で、復元口径は 2.8 cm、器高は 3.1 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗黄褐色、黒灰色である。内面は淡黄褐色で、一部黒灰色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデ、一部に粘土接合痕が残っている。内面は指オサエ後、不定方向のナデである。口縁部は、指で外から内へ押すようにして作りだしている。



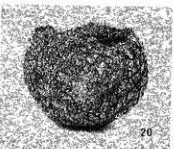
第25図



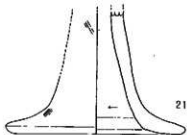
19 (第26図) は埴で、復元口径は 3.6 cm、器高は 3.9 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は体部がナデで、底部は指オサエ後ナデている。内面は、指オサエのちから上へ強く引き上げるような指ナデで、口縁部付近は指オサエである。



第26図



20 (第27図) は壺と思われ、残存器高は 3.7 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗灰色である。胎土は角閃石・白色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、



第27図



外面は指オサエ後ナデている。内面は口縁部が指オサエ後ナデで、下半部は不定方向の指ナデである。全体的に、成形時の指圧痕が強く残っている。

21 (第28図)は高杯の脚部で、残存器高は 6.3 cm、底径は 9.6 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、一部にハケ目が残っている。裾部はヨコナデである。内面は柱状部が回転ヘラ削り、裾部はナデである。

22 (第29図)は壺と思われ、残存器高は 1.9 cmを測る。色調外面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。内面は褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は赤褐色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部はナデでいる。内面は指オサエと思われる。

23 (第30図)は壺と思われ、残存器高は 3.4 cmを測る。色調外面は明黄褐色である。内面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデでいる。内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、一部指圧痕が残っている。また底部は強い指オサエである。

24 (第31図)は壺と思われ、残存器高は 2.2 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエを施している。内面は底部が指オサエで、胴部は下から上へ粘土を引き上げた指ナデである。ハ所指圧痕が強く残っており、成形後上器をつまんで移動させた際についた痕と考えられる。

25 (第32図)は壺で、残存器高は 4.8 cmを測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は石英・白色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため不明である。内面は下半部は下から上へ引き上げるような指ナデで、上半部は不定方向にナデている。口縁部は調整が不明である。また底部からの立ち上がり付近に爪痕のようなものがみられる。内面は全体的に成形時の指圧痕が強く残っている。

26 (第33図)は壺で、残存器高は 4.8 cmを測る。色調外面は黄褐色で、一部褐色、暗褐色である。内面は暗褐色で、



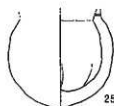
第29図



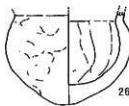
第30図



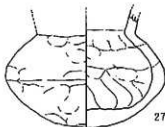
第31図



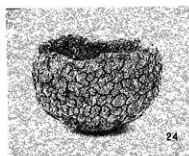
第32図



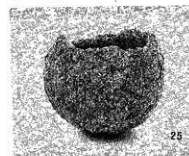
第33図



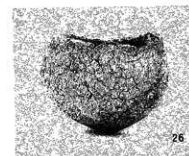
第34図



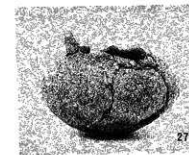
24



25



26



27

一部黄褐色である。胎土は石英・雲母・長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面胴部は指オサエ後ナデである。胴部の腹は、横方向のナデで作りだしている。内面は、底部から頸部にかけて下から上へ強く引き上げたような指ナデで、口縁部はナデている。

27 (第34図) は壺で、復元口径は 5.0 cm、器高は 6.2 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗褐色である。胎土は角閃石・長石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデている。内面は上半部は指オサエ後ナデで、下半部は指によるナデである。内面胴部には、粘土紐の接合痕が二ヶ所残っている。

28 (第35図) は壺である。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部には粘土紐接合痕が残っている。内面は器面荒れのため判別しにくいが、指ナデと思われる。全体的に器面荒れが激しい。

29 (第36図) は壺で、残存器高は 3.7 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部灰褐色

である。黒疵がみられる。内面は暗黄褐色である。

胎土は角閃石・長石・赤色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくいが、指オサエ後ナデと思われる。

一部、ヘラ状工具による圧痕が見られる。内面は、下から上へ引き上げたような指ナデである。内外面ともに粘上ひもの接合痕がわずかに残っている。全体的に成形時の指圧痕が強く残っており、器形のゆがみも大きい。

30 (第37図) は甕で、復元口径は 5.8 cm、

器高は 4.7 cm を測る。色調外面は褐色で、一部赤褐色である。内面は褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエで、頸部には粘土紐の接合痕が残っている。内面は、胴部が下から上へ引き上げたような指ナデで、一部横方向にナデた痕も残っている。

また縦方向の粘土接合痕がみられる。

口縁部は、指オサエによって成形している。

31 (第38図) は高坪の脚部で、残存

器高は 7.3 cm を測る。色調は内外面ともに明黄褐色である。胎土は雲母・赤褐色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくいが、ナデと思われる。また坪底部内面はナデ



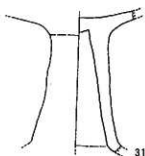
第35図



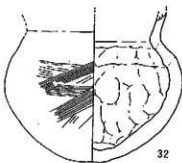
第36図



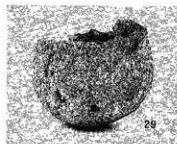
第37図



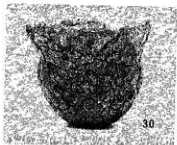
第38図



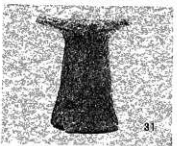
第39図



27



30



31



32

と思われる。脚部は器面荒れのため判別しにくい、下半部がナゲで、上半部がケズリ、坏との接合部分は木調整と思われる。

32 (第39図)は壺で、残存器高は 7.7 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色と暗褐色である。また黒斑がみられる。内面は黄褐色である。胎土は石英・雲母・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部はナゲで、胴部上半部はヘケ日、胴部下半部から底部にかけてはナゲでいる。内面は、口縁部分はナゲでいる。また上半部には、粘土紐の接合痕が二ヶ所残っており、粘土紐を接合する際の指オサエが、強く残っている。下半部は指ナゲで、底部には強く指オサエが残っている。

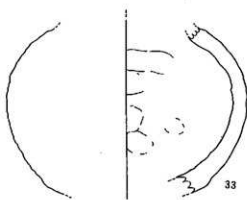
33 (第40図)は壺と思われる。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色である。内面は黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面剥落が激しく不明である。内面上半部は横方向の指ナゲで、下半部は指オサエ後ナゲでいる。

34 (第41図)は壺の底部と思われ、残存器高は 1.8 cm を測る。色調外面は黒褐色で、一部黄褐色である。また黒斑がみられる。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに摩滅が激しく不明であるが、外面はナゲの可能性が有る。

35 (第42図)は高坏の脚部で、残存器高は 8.7 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・長石・角閃石・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面剥落が激しく不明である。内面は、柱状部にシボリ痕と工具ナゲがあり、裾部には指オサエがみられる。

36 (第43図)は瓶で、残存器高は 3.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部につまんだような指オサエがみられ、上半部から底部にかけては指オサエ後ナゲがみられる。内面は口縁部につまんだような指オサエがみられ、上半部から底部にかけては指オサエ後、指ナゲがみられる。

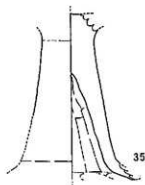
37 (第44図)は壺で、残存器高は 4.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色と明黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲでいる。内



第40図



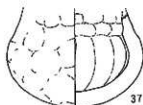
第41図



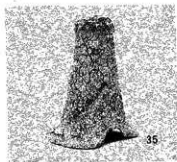
第42図



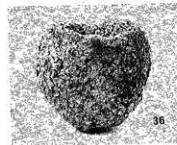
第43図



第44図



35



36

面は下から上へ粘土を引き上げたような強い指ナゲで、口縁付近には、強く指で押さえたために、縦方向に粘土の重なった痕が残っている。また口縁をつまみあげて、頸部の稜を作っている。

38 (第45図) は壺で、残存器高は 2.8 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は、上半部から底部にかけては指オサエ後ナゲである。口縁部はつまんだような指オサエで、押さえることによって稜をつくりだしている。内面、口縁部はつまんだような指オサエで、底部中心から上半部にかけては、下から上へ引き上げるような指ナゲである。またなでたその指をとめるような形で、上半部には指オサエがみられる。

39 (第46図) は壺で残存器高は 4.1 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は石英・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲで、下半部には粘土組の接合痕が残っている。また一部は表面が剥落している。内面は下半部が指ナゲで、上半部は粘土を寄せたヒダ状の盛り上がりりと、指オサエが残っている。

40 (第47図) は鉢で、口径は 4.4 cm、器高は 4.6 cm、底径は 3.4 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部をつまんで稜を作っており、その際の指オサエが強く残っている。体部は指オサエ後ナゲでいる。また底部は下に押し付けたように成形し、ナゲで平坦に作っている。内面は口縁部がナゲで、体部は下から上へ引き上げるような指ナゲである。また器形にはゆがみがある。

41 (第48図) は壺で残存器高は 6.4 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗褐色である。内面は黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外ともに器面の剥落が激しく、不明であるが、指オサエらしき痕跡がとところどころにみられる。内面底部には、放射状の工具ナゲがみられる。

42 (第49図) は壺で、残存器高は 8.1 cm、底径は 4.9 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗黄褐色である。



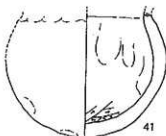
第45図



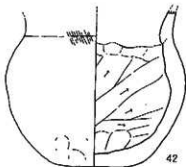
第46図



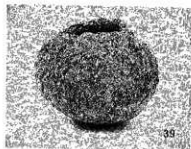
第47図



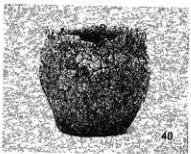
第48図



第49図



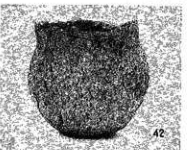
38



39

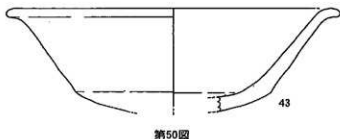


40



41

胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁から頸部にかけては、ハケ目後ナデている。胴部上半部から下半部にかけては、指オサエ後ナデている。また底部中央部には粘土紐の接合痕が残っている。内面は口縁部がナデで、頸部には粘土紐の輪積み痕が一ヶ所残っている。そのすぐ下は粘土紐を接合する際の指オサエが見られる。胴部は、下から斜め上へのヘラケズリである。底部はナデと指オサエを施している。



43 (第50図)は高杯の坏部で、復元口径は16.7 cm、残存器高は5.4 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、器面の荒れが激しく判別はし難いが、内外面ともにヨコナデと思われる。



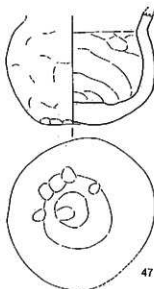
44 (第51図)は壺と思われる、残存器高は3.5 cm、底径は5.9 cmを測る。色調外面は褐色で、一部暗黄褐色と暗褐色である。内面は褐色である。胎土は赤褐色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面体部は指オサエ後ナデで、底部はナデている。内面上部は指頭による指オサエで、体部は指ナデである。底部と体部の境には工具によるオサエが残っている。底部はナデている。



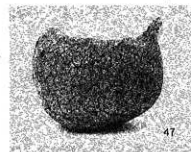
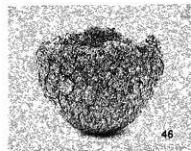
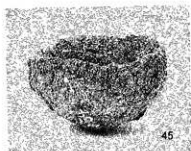
45 (第52図)は壺と思われる、残存器高は1.7 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、器面荒れのため内外面ともに判別しにくい、外面は指オサエ後ナデと思われる。また内面は指オサエと思われる。



46 (第53図)は鉢で、復元口径は3.0 cm、器高は2.9 cmを測る。色調外面は淡黄褐色で、一部は暗黄褐色と黒褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部が強い指オサエで、外と内を強くつまんで稜を作り出している。下半部は指オサエ後ナデている。内面は指オサエのちナデである。



47 (第54図)は壺と思われる、残存器高は5.8 cmを測る。色調外面は褐色で、一



部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデであり、底部には足跡状のくぼみが残っている。内面は指オサエのち、下から上へ引き上げるような指ナデで、底部は指オサエである。頸部のすぐ下には指オサエが残っており、口縁部はナデている。底部は指オサエである。



第55図

48 (第55図) は器種は不明であるが、残存器高は 2.3 cm、底径は 2.0 cm を測る。色調外面は暗褐色である。内面は暗褐色である。胎土は雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れが激しいが、指オサエと思われる。内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、2ヶ所に爪痕のようなものが残っている。また一部には指圧痕が残っており、成形後土器を移動するためつまんだものと思われる。成形時の器形のゆがみが大きい。



第56図

49 (第56図) は碗で、復元口径は 3.4 cm、器高は 2.7 cm、底径は 3.3 cm を測る。色調外面は褐色である。内面は褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面体部は指オサエ後ナデであり、底部はナデである。内面は口縁部がナデで、下半部が指ナデである。また口縁は、外と内を強くつまみあげて成形しており、指圧痕が強く残っている。



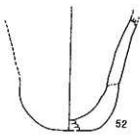
第57図

50 (第57図) は碗で、復元口径は 3.2 cm、残存器高は 1.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、ナデている。内面は指オサエで、一部は指で軽く押さえつつ、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデがみられる。また口縁端部はつまみあげている。



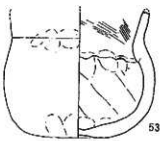
第58図

51 (第58図) は碗で、口径は 3.5 cm、残存器高は 3.2 cm を測る。色調外面は淡褐色である。内面は淡褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は剥落がひどく判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は口縁部が指オサエで、下半部は不定方向の指ナデである。胴部は内外面ともに、成形時の指圧痕が強く残っている。

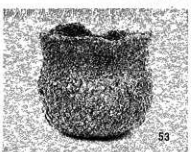
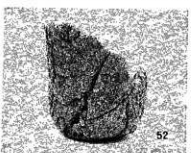
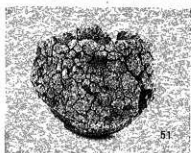
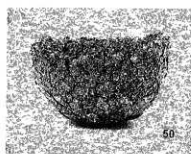


第59図

52 (第59図) は碗と思われる、残存器高は 5.7 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面

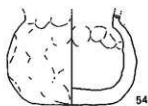


第60図



ともに器面の剥落が激しく、不明である。下半部には、粘土紐の接合痕が一ヶ所みられる。

53 (第60図) は壺で、復元口径は 7.3 cm、器高は 6.8 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。また黒斑がある。内面は暗褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、ナデである。内面は、口縁部にハケ目を施している。頸部には、粘土紐輪積みの痕が残っている。またその盛り上がった粘土を押さえるように、指オサエを施している。胴部は指ナデで、底部は指オサエと指ナデである。



第60図

54 (第61図) は壺で、残存器高は 4.7 cm、底径は 4.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部褐色である。内面は暗褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・石英・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデであり、口縁はつまみあげて稜を作っている。内面の口縁近くには指頭によるオサエ、下半部には横方向のナデ、底部には指ナデの稜が残っている。また内面頸部には、僅かに粘土紐の接合痕が残っている。



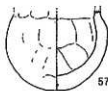
第61図

55 (第62図) は壺と思われる、残存器高は 3.9 cm、底径は 3.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部は不定方向にナデている。また一部に粘土の接合痕が残っている。内面は指ナデで、口縁部はつまみあげている。また内外面の一部に指圧痕がはっきりと残っており、成形後上器をつまんで移動させた際のものと思われる。

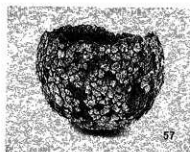


第62図

56 (第63図) は壺と思われる、残存器高は 1.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに、指オサエ後ナデを施している。

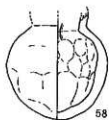


第63図

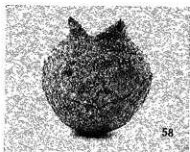


57

57 (第64図) は壺で、残存器高は 4.2 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は黒褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。頸部には、口縁部をつまみあげた際の、指頭圧痕が残っている。内面は、強い指ナデが残っている。また一部に指頭止痕があり、上器を成形後、移動のためつまんだ際ついたものと考えられる。

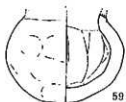


第64図

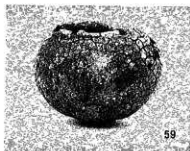


58

58 (第65図) は壺で、残存器高は 5.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は白色粒・角閃石・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ



第65図



59

後ナデている。内面は、口縁部が器面荒れのため調整不明であるが、体部上半部は指頭によるオサエで肩部のふくらみを作っている。一部には、粘土紐の輪積みの接合痕が残っている。体部下半部は指ナデで、底部は指オサエである。

59 (第66図) は壺で、口径は 4.0 cm、残存器高は 4.7 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、肩部は外と内をつまんで成形している。また口縁部付近には、粘土紐の接合痕が残っている。内面は、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、口縁部は横方向にナデている。

60 (第67図) は壺で、復元口径は 5.2 cm、器高は 2.9 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、ナデである。内面体部は指ナデで、底部には粘土を強く指圧した際の、粘土の盛り上がりが見られる。また全体的に、成形時の指圧痕が残っている。

61 (第68図) は壺と思われ、残存器高は 3.8 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・長石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部はナデている。内面は、下半部が下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、底部には指圧痕が残っている。上半部は指頭によるオサエを施している。

62 (第69図) は残存器高、2.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部は指圧痕によりやや尖ったようになっている。内面は不定方向のナデで、底部は指オサエである。全体的に成形時の指圧痕が残っている。

63 (第70図) は残存器高、2.1 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに指オサエ後ナデである。また頸部は指頭で押さえて後を作っている。

64 (第71図) は壺と思われ、残存器高は 2.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、一ヶ所つまんだような指頭指圧痕が残って



第67図



第68図



第69図



第70図



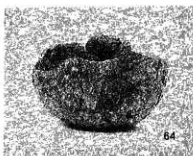
第71図



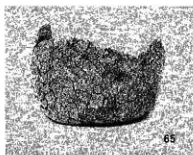
第72図



第73図



64



65



66

いる。また、その部分が引っ張られたようなかんじでの器形のゆがみが大きい。

65 (第72図) は埴で、残存器高は 3.1 cm、底径は 4.0 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデており、底部は下に押さえつけるようにして成形した後、ナデている。また、中心部はわずかに盛りあがっている。内面は、底部が指オサエのち指ナデで、胴部がナデである。



第74図



第75図

66 (第73図) は壺で、残存器高は 3.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部ミスが付着している。内面は暗黄褐色である。胎土は石英・白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデている。内面は指ナデである。一部、成形時の指オサエが強く残っており、成形後移動させる際につまみあげたと思われる。

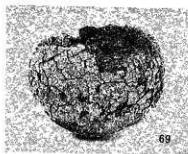
67 (第74図) は埴で、口径は 5.4 cm、器高は 3.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部付近には何か凹凸のあるものの上に置いたか、何らかの工具で傷つけてしまったような痕がある。内面は、底部から胴部下半部にかけて、横方向に回転させ、えぐるようにした指ナデを施している。上半部には口縁部をつまみあげた際の指痕が残っている。また口縁を左右に引っ張ったような、器形のゆがみがある。



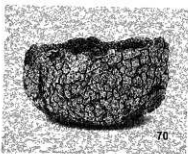
第76図



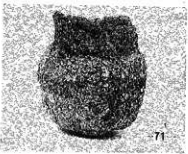
第77図



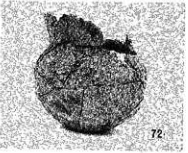
69



70

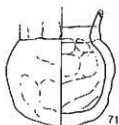


71



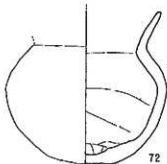
72

68 (第75図) は壺と思われる、残存器高は 3.1 cm、復元底径は 3.0 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含む。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい、ナデと思われる。内面は指ナデで、底部は指オサエである。



第78図

69 (第76図) は埴で、復元口径は 3.4 cm、器高は 2.8 cm を測る。色調外面は明褐色で、一部褐色である。内面は明褐色で、一部褐色と黒褐色である。胎土は長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエである。口縁部はつまみあげて稜を作っている。



第79図

70 (第77図) は壺と思われる、残存器高は 2.2 cm を測る。色調外面は淡黄褐

色である。内面は淡黄褐色である。胎土は赤褐色粒・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は体部が指オサエ後ナデで、底部は指オサエである。内面は指オサエで、一部に粘土を引き上げてできたような、粘土の接合痕が残っている。底部は指オサエである。



第80図

71 (第76図)は壺で、残存器高は 6.0 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黒褐色で、一部暗黄褐色である。また黒斑がある。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は全体的に指オサエ後ナデている。頸部には粘土紐の接合痕が残っている。内面は胴部下半部が指ナデで、下から斜め上へ回転させるように整えている。上半部は指オサエで、外と内を指で押さえるようにして、肩部のふくらみを作っている。また口縁部はナデている。



第81図

72 (第79図)は壺で、復元口径は 7.8 cm、器高は 8.0 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色と褐色である。黒斑がある。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為調整は不明であるが、わずかに残る部分はナデである。内面は口縁部がナデで、胴部が斜め方向への指ナデである。一部に胴部のふくらみを出すためと思われる指圧痕が残っている。底部には、粘土を掻きだしたような指ナデの凹みがある。



第82図

73 (第80図)は残存器高、2.1 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに、指オサエ後ナデている。



第83図

74 (第81図)は壺と思われる、残存器高は 3.7 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデである。内面は指オサエで、底部には一部指ナデが残っている。また器形のゆがみが大きい。



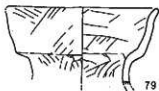
第84図

75 (第82図)は壺と思われる、残存器高は 3.3 cm、底径は 2.8 cm を測る。色調外面は明褐色で、一部褐色である。内面は明褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、胴部下半部には、粘土紐の接合痕が残っている。内面は、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデである。

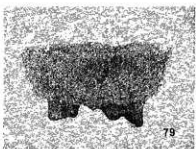
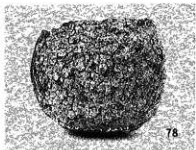
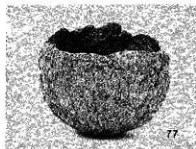


第85図

76 (第83図)は残存器高、2.5 cm を測る。色調外面は暗褐色である。内面は暗褐色で、一部黒褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れが激しく、判別しにくい指ナデと思われる。内面は、指オサエのちから上へ粘土を引き上げたような指ナデであ



第86図



る。

77 (第84図) は壺と思われる、残存器高は 2.4 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面も指オサエ後ナデである。全体的に成形時の指オサエが、強く残っている。

78 (第85図) は残存器高、3.4 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。外面は指オサエ後、ナデである。内面は、下から上に粘土を引き上げたような指ナデで、底部近くには指圧痕も残っている。また口縁端部は粘土をつまみあげている。

79 (第86図) は壺の口縁部で、復元口径は 8.0 cm、残存器高は 3.9 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は石英・雲母・長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面の剥落が激しいため調整は不明であるが、一部にハケ目らしい痕跡がある。

80 (第87図) は高坏である。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面の磨耗が激しく、調整は不明である。

81 (第88図) は壺である。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面上半部は横方向の指ナデで、頸部は指オサエと思われる。

82 (第89図) は壺と思われる、残存器高は 3.0 cm を測る。色調外面は褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部は指圧痕が特に強く残っている。内面底部から胴部下半部にかけては指ナデで、一部に未調整の粘土接合痕が残っている。頸部は外と内を指頭で強くつまみ、頸部の稜を作り出している。

83 (第90図) は壺で、残存器高は 4.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色



第87図



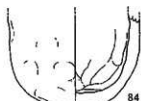
第88図



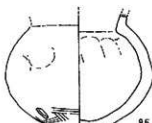
第89図



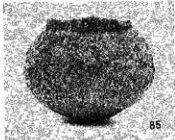
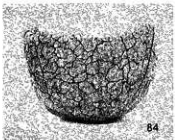
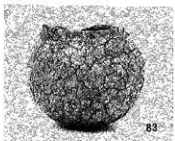
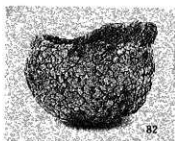
第90図



第91図



第92図



である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面胴部は、下から上へ引き上げるような指ナデである。口縁部付近はナデで、一部に指圧痕が強く残っている。これは成形後、土器を移動させる際につまんだものと考えられる。

84 (第91図) は壺と思われ、復元口径は 6.3 cm、器高は 5.1 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部褐色と淡黄褐色である。内面は淡黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、丁寧なナデである。内面は、下から上へ引き上げるような強い指ナデを施している。

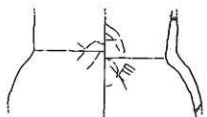
85 (第92図) は壺で、残存器高は 6.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。また黒斑がある。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面上半部はナデで、一部指オサエが残っている。下半部はハケ目後ナデである。内面の口縁部はナデで、胴部上半部は指オサエである。またその下には、指オサエ痕を消すように横方向のナデを施している。底部は、回転するようにナデている。胴部下半部に一ヶ所、穿孔がみられる。

86 (第93図) は壺である。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面の剥落が激しく、ほとんど確認できないが、一部成形時の指頭圧痕が残っている。

87 (第94図) は壺と思われ、残存器高は 3.8 cm を測る。色調外面は暗褐色である。内面は褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエである。内面は指オサエ後、強い指ナデである。全体的に強く指圧痕が残っている。

88 (第95図) は壺で、復元口径は 5.0 cm、器高は 3.2 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面荒れの為判別しにくい、外面は指オサエ後ナデで、内面は指ナデと思われる。また口縁部は指頭でつまむようにして、稜を作り出している。

89 (第96図) は壺で、復元口径は 3.9 cm、器高は 3.6 cm を測る。色調外面は明褐色で、一部暗黄褐色である。内面は褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、



第91図

86



第92図

87



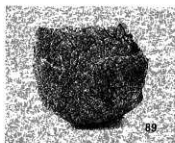
第93図

88



第94図

89

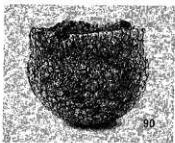


89

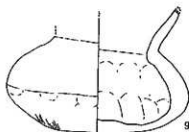


第95図

90

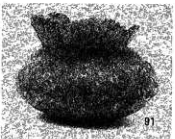


90



第96図

91



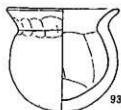
91

口縁部は指頭圧痕が残っている。また胴部上半部には粘土組織接合痕が残っている。内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、一部には強く指頭圧痕が残っている。口縁部は軽くつまんだのちナデている。



第99図

90 (第97図)は甕で、復元口径は4.1 cm、器高は3.7 cmを測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色と橙色である。内面は暗黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面胴部は指オサエ後ナデで、口縁部は指オサエである。内面は下から上へ粘土を強く引き上げたような指ナデで、底部は指オサエである。口縁部は指オサエ後横方向へ軽くナデている。また口縁部は外と内を指でつまむようにして、稜を作り出している。



第100図

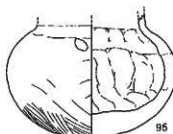
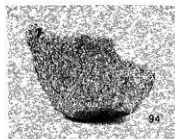
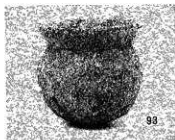
91 (第98図)は壺で、残存器高は6.3 cmを測る。色調外面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は上半部がナデで、下半部は指オサエの後ハケ目、さらに丁寧にナデている。

内面は口縁部がナデで、胴部から底部にかけて、指オサエ後指ナデである。また器形はゆがみが大きい。



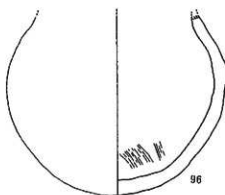
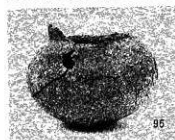
第101図

92 (第99図)は高杯の坏部である。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面の磨耗が激しく不明だが、外面は工具によるナデと思われる。



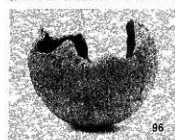
第102図

93 (第100図)は完形品の壺で、口径は5.8 cm、器高は5.4 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面胴部から底部にかけてはナデで、頸部には粘土の接合痕が残っている。口縁部は指オサエ後一部ナデである。口縁は指でつまんで稜を作っており、その際口縁端部をナデ調整していないので、花弁状に端部が割れている。内面胴部は指ナデで、一部に指オサエも残っている。口縁部はナデである。



第103図

94 (第101図)は壺と思われる、残存器高は4.0 cm、底径は3.6



cmを測る。色調外面は黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面荒れが激しく判別しにくい、外面は指オサエ後ナデである。また、内面は上半部が指オサエで、下半部が指ナデと思われる。

95 (第102図) は壺で、器高は6.5 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は雲母・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は上半部ナデで、下半部はハケ目を施している。一部には指圧痕が残っている。内面は指ナデで、口縁部はナデ、また上半部には粘土の接合痕が残っている。上半部には穿孔がある。

96 (第103図) は壺で、残存器高は9.3 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は石英・白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為、不明である。内面もやはり器面荒れが激しいが、残った部分から見ると上半部はナデで、下半部は指オサエ後ハケ目を施している。

97 (第104図) は壺で、口径は4.1 cm、器高は3.1 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに剥落が激しく判別し難いが、外面、口縁部はつまんだような指オサエで稜を作っている。上半部から底部にかけて、指オサエ後ナデが見られる。内面は上半部から底部にかけて指ナデが見られる。口縁部は指オサエである。

98 (第105図) は器種は不明である。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指ナデである。全体的に成形時の指圧痕が残っている。

99 (第106図) は壺で、残存器高は3.6 cmを測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色と暗褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・白色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面胴部から底部にかけては指オサエ後ナデで、口縁部は指オサエである。内面は下から上へ引き上げるような強い指ナデで、口縁部は指オサエ後ナデ



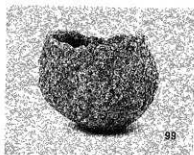
第104図



第105図



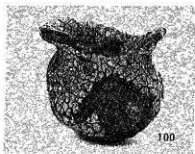
第106図



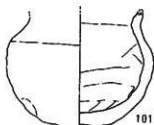
99



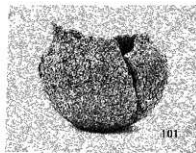
第107図



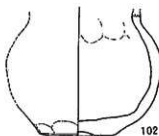
100



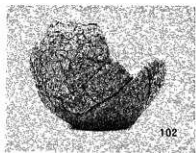
第108図



101



第109図



102

である。底部は指オサエである。

100 (第107図) は壺で、口径は 4.3 cm、器高は 3.7 cm を測る。色調外面は黒褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黒褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部から体部上半部が指オサエで、下半部は指ナデである。頸部はヨコナデである。内面は口縁部が指オサエ後ナデで、体部は指ナデ、底部は指オサエである。



第110図

101 (第108図) は壺で、残存器高は 5.9 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面の剥落が激しいため不明であるが、外面は指オサエ後ナデで、一部に工具痕らしい痕跡ある。内面下半部には強い指ナデと、一部工具痕らしい痕跡がある。

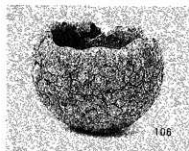


第111図

102 (第109図) は壺で、残存器高は 6.4 cm、底径は 3.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、底部から胴部への立ち上がりには指頭圧痕が残っている。底部は、胴部の方向へナデあげている。中心部は指オサエのため、少し窪んでいる。内面はナデで、口縁部近くにかすかに指オサエが残っている。



第112図

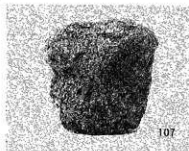


106

103 (第110図) は壺で、復元口径は 4.1 cm、器高は 3.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエ後指ナデである。



第113図

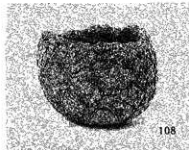


107

104 (第111図) は壺で、残存器高は 3.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗赤褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部が指オサエで、体部は指オサエ後ナデである。また頸部には粘土の接合痕が残っている。内面は口縁部が指オサエ後ナデで、体部は指ナデである。一部に爪痕のようなものが残っている。



第114図

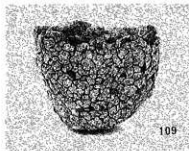


108

105 (第112図) は壺である。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・石英・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面頸部は指オサエで、上半部から下半部にかけては、指オサエ後ナデである。内面、口縁部は指オサエで、上半部から下半部にかけては、指ナデである。



第115図



109

106 (第113図) は壺で、口径は 2.7 cm、器高は 2.6 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んで



第116図

いる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエである。全体的に指オサエにより成形している。

107 (第114図)は高坪塚で、色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は石英・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は剥落のため不明であるが、一部に粘土の接合痕が残っている。内面も器面荒れのため判別しにくい。ナデ及び指オサエと思われる。

108 (第115図)は塚と思われ、残存器高は 3.1 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部黒褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエ後斜め方向への指ナデ後、指を横方向に回転させたようなナデである。底部外面には、何らかの工具痕がある。

109 (第116図)は塚と思われ、残存器高は 3.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指ナデで、一部指オサエである。内面は指オサエ後指を横方向に回転させたようなナデである。全体的に成形時の指オサエが強く残っている。

110 (第117図)は塚と思われ、残存器高は 2.2 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部黄褐色である。内面は淡黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は剥落が激しく判別し難いが、指オサエ後ナデと思われる。内面は上半部から底部にかけて下から上へ引き上げるような指ナデである。全体的に成形時の指オサエが強く残っている。

111 (第118図)は器種は不明で、残存器高は 3.5 cm、底径は 2.6 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後強いナデで、底部は下に強く押し付けて成形したように平らで、ナデを施している。内面は、下から上に粘土を引き上げたような指ナデである。一部に、指圧痕も残っている。

112 (第119図)は塚で、口径は 3.4 cm、器高は 3.0 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色と黒褐色であ



第117図



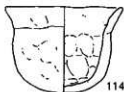
第118図



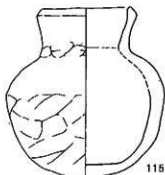
第119図



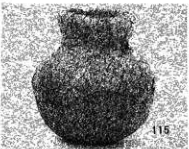
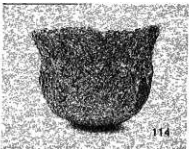
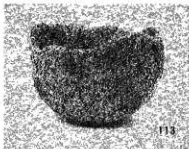
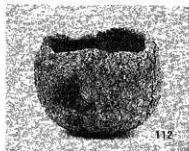
第120図



第121図



第122図



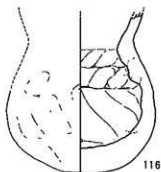
る。また、黒斑がある。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は下から上へ引き上げるような指ナデである。一部指頭圧痕が見られる。

113 (第120図) は壺と思われ、残存器高は 2.5 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、ナデである。内面は口縁部に指オサエで、上半部から下半部にかけて、指ナデである。一部強く指頭圧痕が見られる。

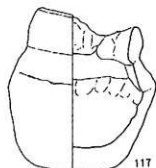
114 (第121図) は甕で、口径は 6.2 cm、器高は 4.5 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黒褐色である。また黒斑がある。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。また頸部には、粘土紐の接合痕がヶ所残っている。内面は口縁部がナデで、そのすぐ下は指オサエで頸部の稜を作っている。胴部下半部は横方向へのナデで、底部は指オサエである。

115 (第122図) は甕で、口径は 4.7 cm、器高は 8.85 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗褐色である。内面は、口縁部は黄褐色で他は不明である。胎土は雲母・角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部はヨコナデである。頸部は、指オサエ後タテナデとヨコナデを施している。また上半部から底部にかけては、指オサエ後工具ナデがみられる。頸部には粘土の接合痕がヶ所見られる。内面は口縁部はヨコナデで、上半部から底部にかけてはタテ方向の指ナデである。

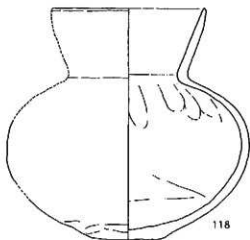
116 (第123図) は甕で、残存器高は 8.2 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部褐色と黄褐色である。内面は明褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部には粘土紐の接合痕が見られる。内面は口縁部がナデ、胴部下半は下から上へえぐるような指ナデで、その後上半部は



第123図



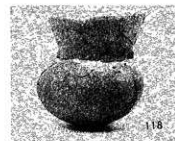
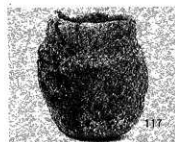
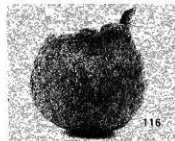
第124図



第125図



第126図



輪積みで粘土を足し、指オサエと指ナゲを施している。底部は不定方向のナゲとオサエである。

117(第124図)はほぼ完形の壺で、口径は5.2cm、器高は8.1cm、底径は4.4cmを測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。また、黒斑がある。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・白色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲで、頸部と肩部に粘土紐の接合度のみられる。内面は、輪積みの痕が肩部から頸部と口縁部の二段に残っている。底部は指ナゲで、胴部下半部は横方向のナゲ、その上部には指オサエが残っている。その後粘土を輪積みで足して、軽く指オサエを施している。口縁は、指オサエの後横方向に軽くナゲている。器形のゆがみが大きい。

118(第125図)は壺で、復元口径は8.0cm、器高は12.3cm、底径は3.5cmを測る。

色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は、口縁部から頸部にかけては、指オサエ後ナゲとヨコナゲで、上半部から底部にかけてナゲが施されている。内面は、口縁部に指オサエ後ナゲとヨコナゲで、上半部に指ナゲ、下半部にナゲ、内底部に斜め並列に約1cm間隔の沈線が施されている。

119(第126図)は壺の口縁部で、復元口径は12.1cm、残存器高は3.8cmを測る。色調外面は褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は雲母・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナゲで、口縁部は一部指でつまんだ痕が残っている。内面は口縁部の一部が指オサエ後ナゲで、胴部は横方向の指ナゲである。頸部下の肩部は、指で押さえて稜をだしている。その後ナゲで整えている。

120(第127図)は残存器高、3.4cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲである。内面は指オサエのち、下から上へ粘土を引き上げたようなナゲで、底部は指オサエである。

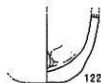
121(第128図)は壺と思われる、残存器高は2.9cm、底径は3.4cmを測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は縦方向の指ナゲで、底部はヨコナゲにナゲている。内面は、斜め方向へ粘土を引き上げたような指ナゲである。一部に指圧痕が強く残っている。器形のゆがみが大きい。



第127図



第128図



第129図



第130図



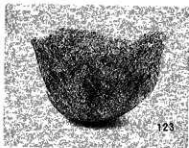
第131図



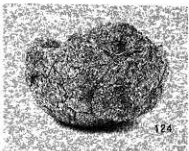
第132図



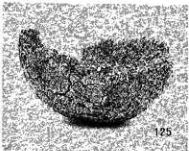
第133図



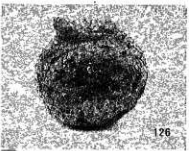
123



124



125



126

122 (第129図)は器種は不明であるが、残存器高は3.4 cm、底径は2.3 cmを測る。色調外面は黄褐色で、一部褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。外面は剥落が激しく判別しにくい、ナデと思われる。内面は指ナデを施している。

123 (第130図)は鉢で、口径は3.6 cm、器高は2.2 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面、体部は指オサエ後ナデである。口縁端部は、外と内を指でつまんで作っており、その後ナデを施している。

124 (第131図)は壺と思われ、残存器高は2.5 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエ後、指を回転させるようにしたナデである。

125 (第132図)は残存器高、2.2 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエ後、指ナデである。

126 (第133図)は壺で、残存器高は3.9 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色と褐色である。内面は、口縁部は暗黄褐色で、他は不明である。胎土は石英・雲母・長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は頸部に指オサエ、上半部から底部にかけては、指オサエ後ナデがみられる。内面は口縁部に指オサエで、上半部から底部にかけては、下から上へ引き上げるようなナデと思われる。

127 (第134図)は壺である。色調外面は暗黄褐色で、ススの付着が見られる。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、器面荒れのため判別しにくい、内外面ともにナデと思われる。

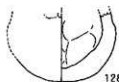
128 (第135図)は壺と思われ、残存器高は3.5 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、頸部に指頭圧痕が残っている。また底部には胎土の接合痕が残っている。内面は下から斜め上へ回転してえぐるような指ナデで、上半部は指オサエである。

129 (第136図)は壺で、復元口径は3.0 cm、器高は2.5 cmを測る。色調外面は淡黄



第134図

127



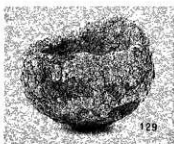
第131図

126



第132図

129

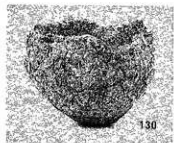


129

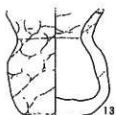


第130図

130

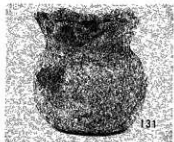


130

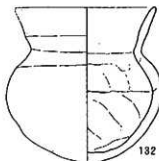


第138図

131

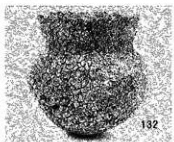


131



第139図

132



132

褐色で、一部褐色と橙色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面体部は、下から上へ引き上げるような指ナデである。一部成形時の指オサエがみられる。口縁部は外と内を指で押さえて成形し、壁を作った後ナデている。



第130図

130 (第137図) は壺で、口径は 2.6 cm、器高は 2.4 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに指オサエ後ナデである。全体的に、成形時の指オサエが強く残っている。



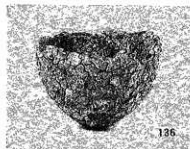
第141図

131 (第138図) は壺で、残存器高は 5.4 cm、底径は 3.75 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部褐色である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は石英・雲母・長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部に粘土紐の接合痕がみられる。内面は指オサエ後指ナデで、下半部と頸部に粘土紐の接合痕がみられる。



第142図

132 (第139図) は壺で、復元口径は 7.5 cm、器高は 8.1 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、頸部は指で押さえながら横方向になでている。内面の口縁部分はナデで、頸部から胴部上半部は輪積みの粘土紐接合痕と指オサエの痕が残っている。下半部は指ナデである。

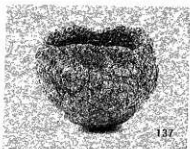


136



第143図

133 (第140図) は残存器高、2.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は雲母・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部は指でつまんでおり、尖っている。内面は一部指ナデである。全体的に成形時の指痕が残っている。

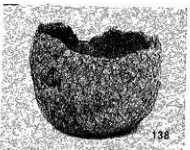


137



第144図

134 (第141図) は壺と思われる、色調外面は黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は剥落が激しく判別し難いが、指オサエ後ナデと思われる。内面は口縁部は指オサエで、上半部は指ナデである。

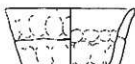


138



第145図

135 (第142図) は壺で、復元口径は 2.5 cm、器高は 3.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ



第146図



139

後ナデで、内面は指オサエ後、一部ナデである。

136 (第143図) は埴で、口径は 3.4 cm、器高は 2.8 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、ナデである。内面は指オサエ後、丁寧なナデである。一部に工具痕と思われる痕がある。



第147図

137 (第144図) は壺と思われ、残存器高は 2.6 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面体部は指オサエ後、ナデである。内面は、指オサエ後ナデである。口縁部は、指頭によるオサエで稜を作り出している。



第148図

138 (第145図) は埴で、残存器高は 3.2 cm、底径は 3.0 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部は下に押し付けて成形したように、平坦に作っている。内面底部には指圧痕が残っている。胴部は下から上へ引き上げるようなナデである。



第149図

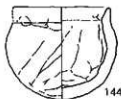
139 (第146図) は鉢で、口径は 6.9 cm、器高は 4.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒色である。また、黒斑が見られる。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、

外面は指オサエ後ナデで、外面胴部と口縁部の境目に、粘土の輪積みの痕が残っている。内面は指オサエ後ナデで、口縁部は粘土をつまみあげて稜を作り出している。内外面ともに、成形時の指頭圧痕が強く残っている。



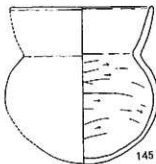
第150図

140 (第147図) は壺と思われ、復元口径は 8.3 cm、残存器高は 3.4 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面荒れのため、不明である。



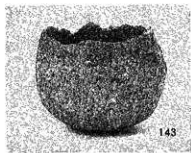
第151図

141 (第148図) は残存器高、3.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部の中心部に粘土の接合痕が残っている。内面は、下から斜め上方向へ粘土をえぐるように強く押さえながら引き上げた、ナデである。

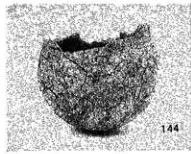


第152図

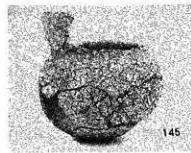
142 (第149図) は壺で、残存器高は 2.7 cm を測る。色調外面は褐色で、一部暗黄褐色である。内面は褐色である。胎土は



143



144



145

白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエである。

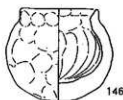
143 (第150図) は壺で、口径は 3.9cm、器高は 3.5cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面体部は、指オサエ後ナデである。内面は口縁部が指オサエで、胴部は指オサエ後、下から上へ引き上げるようなナデ、底部は指オサエである。口縁部は指でつまんで稜を作りだしており、外面は指頭圧痕が強く残っている。

144 (第151図) は壺で、残存器高は 4.85cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部が指オサエで、上半部から底部にかけては指ナデである。内面、口縁部はやや強い指オサエで、上半部から底部にかけては下から上へ引き上げるような指ナデである。一部成形時の指圧痕が強く残っている。

145 (第152図) は壺で、復元口径は 7.5 cm、器高は 8.3 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。また、ススの付着が見られる。内面は暗黄褐色である。胎土は石英・長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部がヨコナデで、上半部から底部にかけては指オサエ後ナデである。内面は口縁部がヨコナデで、上半部から底部にかけては工具ナデである。

146 (第153図) は壺で、復元口径は 4.0cm、器高は 4.8cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黒褐色と暗褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部には、つまみあげた際の指頭圧痕が強く残っている。内面の頸部から下半部にかけては、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、口縁部は指オサエである。

147 (第154図) は残存器高、1.8 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色と褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は刺落が激しく不明である。内面は指ナデである。余体的に、成形時の指オサエが強く残っている。



第153図



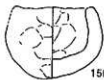
第154図



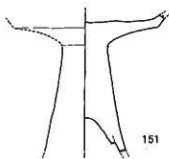
第155図



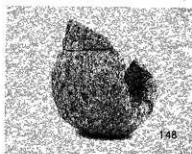
第156図



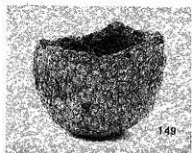
第157図



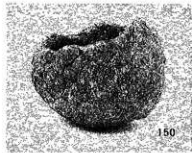
第158図



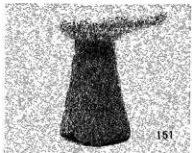
148



149



150



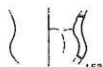
151

148 (第155図) は壺で、残存器高は4.1cmを測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部と体部の境に粘土の接合痕が残っている。内面は口縁部が指オサエ後ナデで、体部は指ナデである。口縁部は外と内をつまんで稜をだしている。



第159図

149 (第156図) は壺で、復元口径は4.2cm、器高は3.8cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、1ヶ所指圧痕が強く残っている。これは成形後、土器を移動させる際につまんだ痕と思われる。また口縁部は指オサエである。



第160図

150 (第157図) は壺で、口径は4.0cm、器高は3.8cmを測る。色調外面は褐色で、一部暗褐色と黒褐色である。内面は褐色である。胎土は赤褐色粒・雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエである。一部、強く指オサエが残っている。

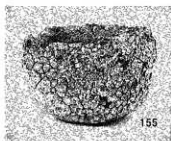


第161図

151 (第158図) は高杯の脚部で、色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。裾部は欠損しており、坏部は一部のみ残存している。調整方法は、内外面ともに器面荒れのため不明である。柱状部内部には、他の個体と思われる何かはまり込んでいる。剥落が激しく調整などは不明である。

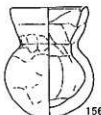


第162図

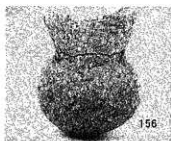


155

152 (第159図) は残存器高、1.9cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は強く押さえた後、指ナデを施している。

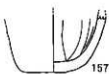


第163図



156

153 (第160図) は壺で、色調外面は黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため、不明である。内面、口縁部は器面荒れのため調整は不明であるが、一部、体部は指オサエと思われる。

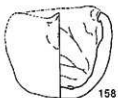


第164図

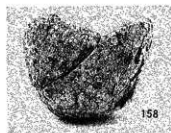


157

154 (第161図) は残存器高、1.9cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部には口縁部をつまみあげた際の指圧痕が残っている。内面は指オサエで、一部下から上へ粘土を引き上げたようなナデが残っている。



第165図



158

155 (第162図) は壺で、復元口径は4.2cm、器高は2.9cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部褐色

である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部に粘土の接合痕が残っている。内面は、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデである。全体的に、成形時の指圧痕が残っている。

156 (第163図) は壺で、口径は 4.0 cm、器高は 5.8 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗褐色である。内面は淡黄褐色で、一部淡黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部中頃に、粘土輪積みの接合痕が残っている。内面は体部が指ナデで、口縁部から頸部は、粘土ひもを二重に積んで軽く斜め方向にナデている。また輪積みの接合痕が残っている。

157 (第164図) は残存器高、2.8 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黒褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・長石・赤褐色粒・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は底部から下半部にかけて、放射状に下から上へ引き上げるようなナデを施している。

158 (第165図) は壺で、復元口径は 4.6 cm、器高は 4.5 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・赤褐色粒・黒色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は、上半部から底部にかけては指オサエ後ナデと思われる。口縁部は、外側から内側へ口縁端部の粘土を折り返むように、オサエで作り出している。内面は、上半部から底部にかけては指ナデを施している。また上半部には、ナデ上げた粘土の盛り上がりが見られる。

159 (第166図) は壺で、復元口径は 5.5 cm を測る。器高は 4.5 cm を測る。色調外面は褐色で、一部明褐色と黒褐色である。また、黒斑がある。内面は褐色で、一部明褐色である。胎土は赤褐色粒・角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は口縁部がナデで、他は指オサエ後横方向への工具ナデである。一部に壁面が外に出っ張るような強い指圧痕があり、成形後、土器をつまんで移動させる際についていたものと思われる。

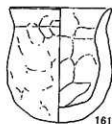
160 (第167図) は壺と思われる。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は雲母・白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は断面荒れのため判別しにくい、指オサエと思われる。内面は、



第166図



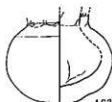
第167図



第168図



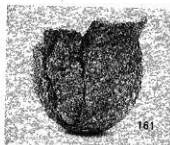
第169図



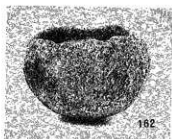
第170図



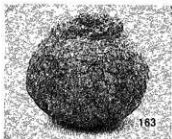
第171図



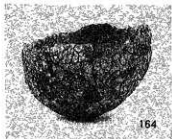
161



162



163



164

胴部が下から上への引き上げるような指ナデである。口縁部は指でオサエて襷を作り出している。

161 (第168図) は壺で、復元口径は 5.3 cm、器高は 6.0 cm を測る。色調外面は褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、頸部に粘土の接合痕が残っている。内面は上半部が指オサエで、下半部は指ナデである。一部には指圧痕が残っている。底部は指オサエである。



第172図



第173図

162 (第169図) はほぼ完形の坑で、口径は 4.35 cm、器高は 3.9 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部暗褐色である。また、黒斑がある。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデと思われる。内面は指オサエ後、下から上へ引き上げるような指ナデである。

163 (第170図) は壺で、残存器高は 4.6 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色と黒褐色である。また、黒斑がある。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部に指オサエで、上半部から底部にかけて指オサエ後ナデしている。底部中心と頸部に、粘土の接合痕がある。内面は口縁部に指オサエで、上半部から底部にかけては指ナデ、底部中心部には放射状の指ナデが見られる。



第174図



第175図

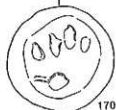
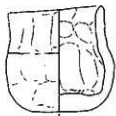


第176図

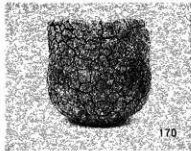
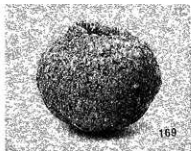
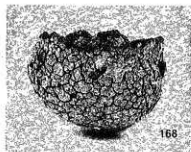
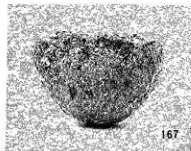
164 (第171図) は残存器高、4.2 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部黒褐色である。内面は淡黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は白色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後、ナデしている。内面は指オサエ後、下から上へ引き上げるような指ナデで、底部は指オサエである。

165 (第172図) は壺で、色調外面は暗褐色で、一部明黄褐色である。内面は暗褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部に指オサエで、上半部から底部にかけては、指オサエ後ナデである。内面は口縁部に指オサエで、底部から上半部にかけて粘土をえぐるように強く、下から上へ引き上げるような指ナデが見られる。

166 (第173図) は坑で、残存器高は 2.0 cm を測る。色調外面は黒褐色で、一部黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、



第177図



外面は指オサエ後、ナデている。内面は指オサエで、一ヶ所強く指圧痕が残っている。これは成形後、土器をつまんで移動させた際のものと考えられる。また外面に、工具で押さえたような2本の平行な沈線がみられる。

167(第174図)は壺で、復元口径は2.6 cm、器高は2.0 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともにナデで、内面底部は指で押さええている。

168(第175図)は壺で、残存器高は3.2 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部が指オサエで、体部は指オサエ後ナデである。内面は口縁部がナデで、体部は下から上に粘土を引き上げるような指ナデである。底部は指オサエである。

169(第176図)は壺で、残存器高は3.3 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。また、黒斑がある。胎土は石英・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのみ判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は頸部が狭いため見えにくい指オサエと思われる。

170(第177図)は壺で、復元口径は4.8 cm、器高は5.6 cmを測る。色調外面は赤褐色で、一部明黄褐色と暗褐色である。また、黒斑がある。内面は赤褐色で、一部明黄褐色である。胎土は白色粒・雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は上半部が指ナデ後ナデで、下半部が指オサエ後ナデである。体部中頃には、粘土の接合痕がある。また底部には、足跡状のくぼみがある。内面は口縁部が指オサエ後ナデで、下半部が指ナデ、一部指オサエである。頸部は外と内を強くつまんで、稜をだしている。

171(第178図)は壺の口縁部で、復元口径は14.2 cm、残存器高は5.3 cmを測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色で、一部暗黄褐色である。また、ススの付着が見られる。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、器面荒れのため判別しにくい、内外面ともにナデと思われる。

172(第179図)は壺で、残存器高は3.2 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は剥落が激しく判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は、口縁部につまんだような指オサエがあり、底部から上半部にかけては、下から上へ引き上げるような指ナデである。一部に成形時の指オサエが



第174図

171



第175図

172



第176図

173



第174図

174



第175図

175



第176図

176

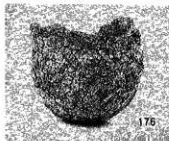


第177図

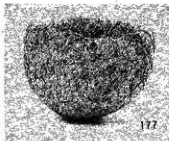
177



175



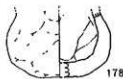
176



177

残っている。

173 (第180図) は壺で、残存器高は 2.8 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナゲで、口縁部につまみあげた際の指頭圧痕が残る。内面は指ナゲである。一部成形時の指圧痕が残っている。



第180図

174 (第181図) は碗で、口径は 2.8 cm、器高は 2.6 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色である。内面は黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナゲで、口縁部にはかすかに指オサエが残っている。内面は指を横方向に回転させたようなナゲで、口縁部にはつまみあげた際の指オサエが残っている。底部は指オサエである。



第181図

175 (第182図) は残存器高、2.4 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部明黄褐色である。内面は明黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面剥落のため、不明である。内面は指を横方向に回転させたようなナゲである。



180

第182図

176 (第183図) は壺で、残存器高は 3.4 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲで、内面は口縁部はナゲで、胴部は下から上へ引き上げるような指ナゲである。一部、指オサエが残っている。



181

第183図

177 (第184図) は碗で、口径は 3.4 cm、器高は 2.7 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・金雲母・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は胴部はナゲで、口縁部は外と内をつまみあげて稜を作り出している。内面は口縁部にはつまみあげた際の指オサエが残っている。胴部は指オサエである。



182

第184図

178 (第185図) は壺である。色調外面は淡黄褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。内面は褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲで、内面は、下から上へ引き上げたような指ナゲである。内面には、成形時の指圧痕が残っている。



183

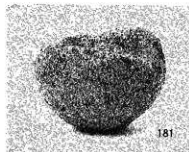
第185図

179 (第186図) は残存器高、2.5 cm を測る。色調外面は褐色である。一部、ススの付着が見られる。内面は褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲで、内面は指オサエで、一部ナゲである。内面は調整が荒く、指オサエの跡が凸凹

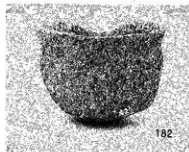


184

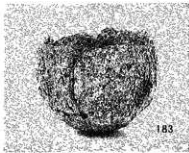
第186図



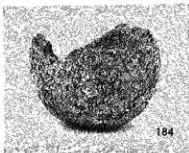
181



182



183



184

である。

180 (第187図)は残存器高、2.0 cmを測る。色調外面は暗褐色である。内面は暗褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面体部は下から上へ引き上げるような指ナデで、底部は指オサエである。全体的に成形時の指圧痕が残っている。

181 (第188図)は壺と思われ、残存器高は2.3 cmを測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデている。内面は指オサエで、一部下から斜め上引き上げるようなナデの痕がある。

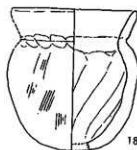
182 (第189図)は壺で、口径は4.2 cm、器高は3.0 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・砂粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部にはつまみあげた際の指圧痕が残っている。内面には口縁部をつまみあげた際の指圧痕が残っている。胴部は指を横方向に回転させたようなナデで、1ヶ所強く指オサエが残っている。これはつまんで移動させた痕と思われる。底部は指オサエである。

183 (第190図)は壺で、残存器高は3.1 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は石英・雲母・長石・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面口縁部は、つまんだような指オサエで、上半部から底部にかけては指オサエ後ナデである。内面は、上半部から底部にかけて指ナデがみられる。一部に、指頭圧痕がある。

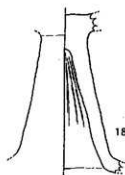
184 (第191図)は壺で、残存器高は3.5 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色で、一部橙色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面頸部は指オサエで、上半部から底部にかけては、指オサエ後ナデがみられる。内面は底部から頸部にかけて、下から上へ引き上げるような指ナデである。全体的に成形時の指圧痕がわずかに残っている。

185 (第192図)は壺で、復元口径は6.6 cm、器高は7.4 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、一部にハケ目が残る。頸部には指オサエを施している。これは指頭によって、頸部の稜を作り出す際の痕である。内面は口縁部がナデで、粘上接合痕が残っている。頸部から下は、斜め方向の指ナデである。

186 (第193図)は高坏脚部で、残存器高は8.3 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・雲母を含んでいる。また、焼成



第192図



第193図



第194図



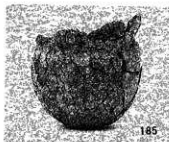
第195図



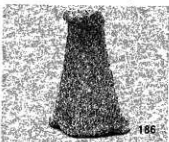
第196図



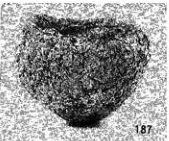
第197図



185



186



187

は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、ナデと思われる。内面は、上半部にシボリ痕が残っている。下半部は、横方向にナデている。

187(第194図)は残存器高、2.4 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部橙色である。内面は明黄褐色で、一部橙色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。

また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエで、内面は指を横に回転させたようなナデである。一部指圧痕も残っている。底部は指オサエである。

188(第195図)は碗で、復元口径は4.0 cm、器高は2.0 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。また、スガが付着している。内面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指ナデである。全体的に成形時の指オサエが残っている。

189(第196図)は器種は不明である。色調外面は淡黄褐色で、一部黒褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は下から上へ引き上げるような、指ナデを施している。一部横方向のナデが見られる。全体的に、成形時の指圧痕が見られる。

190(第197図)は碗で、復元口径は3.8 cm、器高は2.8 cmを測る。色調外面は淡黄褐色で、一部淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため、不明である。内面は器面荒れのため判別しにくい、指ナデと思われる。

191(第198図)は高坪の坏部で、復元口径は18.4 cm、残存器高は4.8 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・雲母・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は上半部はヨコナデで、下半部はナデである。内面は上半部はヨコナデで、下半部はナデである。

192(第199図)は器種は不明であるが、残存器高は2.7 cm、底径は2.8 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。また、スガ付着が見られる。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデている。内面は指オサエ後、下から上へ引き上げるようなナデである。



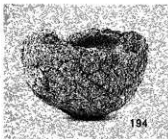
第198図



第199図



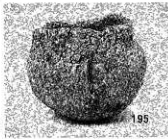
第200図



194



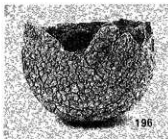
第201図



195



第202図



196



第203図

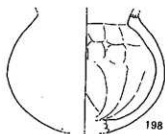


197



第204図

193 (第200図) は埴と思われ、残存器高は 2.0 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色と黒褐色である。内面は黒褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエと思われる。内面は指オサエである。



第205図

194 (第201図) は埴と思われ、残存器高は 2.2 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面とも器面荒れのため判別しにくい、指オサエと思われる。



第206図

195 (第202図) はほぼ完形の壺で、口径は 3.3 cm、器高は 3.5 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部はつまみあげて稜を作り出した際の、指圧痕が残っている。また粘土ひもの接合痕がある。内面は口縁部がナデで、胴部は粘土を下から上へ引き上げたような指ナデである。底部は指オサエである。



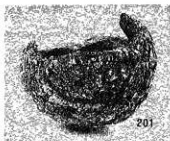
第207図

196 (第203図) は埴で、残存器高は 3.7 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部暗褐色である。また、黒斑がある。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は下から上へ粘土を強く引き上げたような、指ナデである。底部は指オサエである。

197 (第204図) は鉢で、復元口径は 5.6 cm、器高は 3.7 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部はつまみあげて稜を作り出した際の、指圧痕が残っている。内面は指ナデで、一部に強く指圧痕が残っている。また口縁部には、つまみあげた際の指圧痕が残っている。



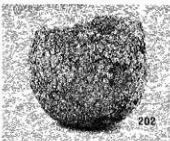
第208図



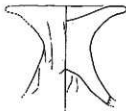
198 (第205図) は壺で、色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、ナデと思われる。内面は口縁部がナデで、胴部は指オサエ後不定方向のナデである。また内面は、全体的に成形時の指オサエが強く残っている。



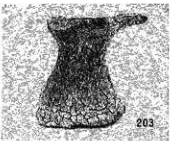
第209図



199 (第206図) は壺と思われ、残存器高は 3.5 cm、底径は 1.3 cm を測る。色調外面は黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面体部は指ナデで、上部は指オサエが残っている。内面は指オサエ後指ナデで、上部には指オサエが残っている。



第210図



成形後上部を移動させる際、指でつまんだものと思われる。

200 (第207図) は壺と思われる、残存器高は 2.7 cm を測る。色調外面は灰褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、胎土は角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエで、一部ナデを施している。

201 (第208図) は壺で、復元口径は 3.2 cm、器高は 3.5 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗褐色である。また、黒斑がある。内面は黒褐色である。胎土は白色粒・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい、指オサエと思われる。内面は指ナデで、底部近くは一部指オサエである。

202 (第209図) は甕で、残存器高は 4.2 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部付近が指オサエで、体部は指オサエ後ナデである。内面は指オサエ後ナデである。

203 (第210図) は蓋と思われる、残存器高は 5.1 cm を測る。色調外面は褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黒褐色で、一部褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指ナデで、内面は上部にシボリ痕が残っている。その下はナデで、つまみ部と思われる部分の内面は指オサエ後ナデである。

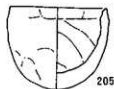
204 (第211図) は壺の底部と思われる、残存器高は 1.9 cm、底径は 4.2 cm を測る。色調外面は淡赤褐色である。内面は褐色は、一部赤褐色である。胎土は白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデである。内面はナデで、一部に工具の痕と思われる調整がある。

205 (第212図) は壺で、復元口径は 5.0 cm、器高は 4.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。また、スス付者が見られる。内面は暗褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、口縁部はつまんだような指オサエである。

206 (第213図) は壺で、復元口径は 3.5 cm、器高は 3.0 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部明黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良で



第211図



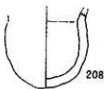
第212図



第213図



第214図



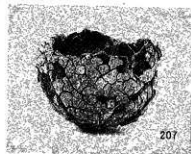
第215図



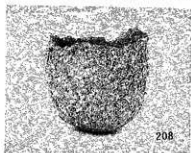
第216図



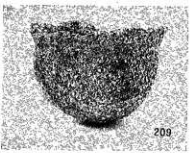
第217図



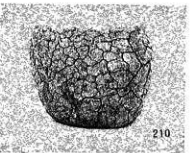
207



208



209



210

ある。調整方法は、内外面ともに指オサエ後ナゲで、口縁はつまみあげている。

207 (第214図) は碗で、口径は 3.6 cm、器高は 2.8 cm を測る。色調外面は暗褐色である。内面は暗褐色である。胎土は長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナゲと思われる。内面はナゲでいる。口縁部は、平らにならすようにナゲでいる。

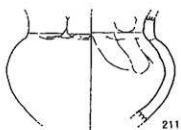
208 (第215図) は壺で、残存器高は 3.8 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため、不明である。内面は、横方向へ指を回転させたようなナゲである。

209 (第216図) は壺で、口径は 4.9 cm、器高は 3.6 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部黒斑がある。内面は明黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石・砂粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナゲと思われる。口縁部はつまみあげており、その際の指頭圧痕が残っている。内面は口縁部が指オサエ後ナゲで、胴部は指ナゲである。

210 (第217図) は器種は不明であるが、残存器高は 3.7 cm、底径は 3.3 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部明黄褐色である。内面は黄褐色で、一部明黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲでいる。内面は丁寧な指ナゲで、口縁部付近は指オサエである。

211 (第218図) は壺で、色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は淡黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面口縁部は指オサエ後ナゲで、上半部から下半部にかけてはナゲである。また頸部には粘土紐の接合痕がみられる。内面は口縁部は指オサエ後ナゲで、上半部から下半部にかけては指ナゲ、また頸部には粘土の接合痕がみられる。

212 (第219図) は壺で、色調外面は淡褐色である。内面は淡褐色である。胎土は石英・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナゲである。内面、上半部は指オサエ後ナゲで、下半部は、横方向への指ナゲである。



第218図



第219図



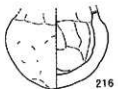
第220図



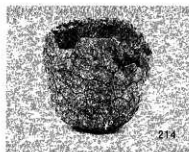
第221図



第222図



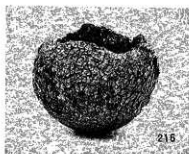
第223図



214

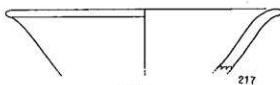


215



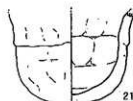
216

213 (第220図) は壺で、残存器高は 4.0 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は下から上へ引き上げるような指ナデで、口縁部はつまみあげている。底部は指オサエである。



第224図

214 (第221図) は埴で、残存器高は 3.5 cm、底径は 2.0 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は、下から上へ粘土を引き上げたような指ナデである。一部、指オサエが残っている。



第225図

215 (第222図) は壺で、復元口径は 4.3 cm、残存器高は 3.0 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに指オサエで、口縁部はつまみあげて作っているため、外と内に指圧痕が強く残っている。



第226図

216 (第223図) は壺で、残存器高は 3.9 cm を測る。色調外面は褐色で、一部黄褐色である。内面は褐色である。胎土は白色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部付近は指オサエである。内面は下から上へ粘土を引き上げたような指ナデで、口縁部付近は指オサエである。



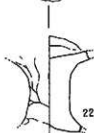
第227図

217 (第224図) は器種は不明が、復元口径は 14.6 cm、残存器高は 3.1 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともにヨコナデである。



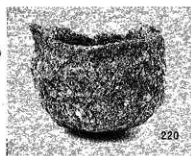
第228図

218 (第225図) は鉢で、残存器高は 4.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁を貼り付けた際の粘土紐の接合痕が残っている。内面は上半部が指オサエで、下半部は横方向への指ナデである。

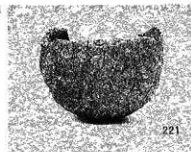


第229図

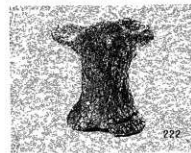
219 (第226図) は壺で、残存器高は 2.9 cm、底径は 1.7 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色と暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は指オサエで、底部はえぐるようにしたナデである。



220

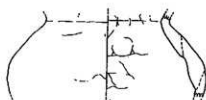


221



222

220 (第227図) は壺で、残存器高は 2.5 cm を測る。色調外面は浅黄褐色である。内面は浅黄褐色である。胎土は雲母・長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は良好である。外面は器面荒れが激しく判別し難いが頸部は指オサエで、上半部から底部にかけては指オサエ後ナデと思われる。内面は頸部に指オサエを施し、上半部から底部にかけては指ナデである。



第230図

223

221 (第228図) は埴で、復元口径は 3.6 cm、器高は 2.7 cm を測る。

色調外面は褐色で、一部暗黄褐色である。内面は褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は石英・白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部は指オサエである。内面は下から上への指ナデで、一部指疔痕も残っている。口縁部は指オサエと思われる。



第231図

224

222 (第229図) は高坏の脚部と思われる。色調外面は黒褐色で、一部黄褐色と暗黄褐色である。内面は褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は雲母・長石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指ナデで、内面は指オサエ後ナデである。器形がつぶしたように、ゆがみが大きい。

223 (第230図) は壺である。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。一部ススの付着がある。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面荒れが激しく判別しにくい、外面は指オサエ後ナデかハケ目調整で、粘土の接合痕が見られる。内面は指オサエ後指ナデで、粘土の接合痕が見られる。



第232図

225

224 (第231図) は壺で、残存器高は 2.9 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい、ナデと思われる。内面は指オサエで、口縁部はナデと思われる。



第233図

226

225 (第232図) は残存器高、3.2 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は赤褐色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は胴部が指オサエ後横方向にナデで、底部は指オサエ後ナデである。内面は下から上へえぐるような指ナデである。



第234図



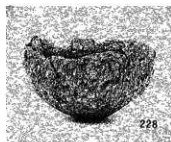
227

226 (第233図) は埴で、復元口径は 3.0 cm、残存器高は 2.4 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部中央付近に粘土の塊が付着している。また口縁部は、指頭で押さええている。内面は指オサエで、口縁部はつまみあげている。



第235図

228



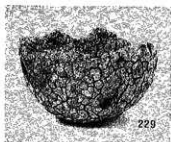
228

227 (第234図) は残存器高、1.9 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黒色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒・長石を含んでいる。



第236図

229



229

また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面剥落のため不明である。内面も器面荒れのため判別しにくい、体部が指オサエ後ナデで、底部が指オサエと思われる。

228 (第235図) は甕で、残存器高は 2.8 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黒褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は指ナデで、一部には強く押さえたための粘土の盛り上がりが残っている。また、上部は指オサエである。



第237図

229 (第236図) は甕で、復元口径は 5.2 cm、器高は 3.5 cm を測る。色調外面は褐色で、一部明褐色と黒褐色である。内面は明褐色で、一部褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、一部は横方向ヘナデで、一部には指オサエが残っている。器形は少しゆがんでいる。



第238図

230 (第237図) は甕と恐れ、残存器高は 3.2 cm、底径は 4.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は下から上へ引き上げるような指ナデである。



第239図

231 (第238図) は甕で、復元口径は 3.6 cm、残存器高は 3.2 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は指オサエ後指ナデで、底部は指オサエである。



第240図

232 (第239図) は甕で、復元口径は 3.6 cm、残存器高は 2.1 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。また、ススの付着が見られる。胎土は角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエで、底部は欠損のため不明である。内面は指オサエである。



第241図

233 (第240図) は残存器高、1.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、ナデと思われる。内面は指オサエ後、下から上へ粘土をえぐりだしたような指ナデである。

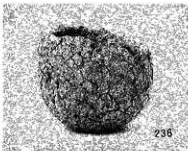
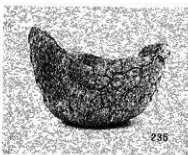


第242図

234 (第241図) は甕で、復元口径は 4.6 cm、器高は 2.9 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は白色粒・雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指



第243図



オサエと思われる。内面も器面荒れのため判別しにくいですが、指オサエと思われる。口縁部は外と内をつまんで稜を作り出している。

235 (第242図) は残存器高、2.8cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。

内面は暗黄褐色で、一部暗灰色である。胎土は角閃石・長石・雲母・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエ後、下から上へ引き上げるような指ナデである。一部工具痕があると思われる。

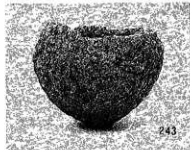
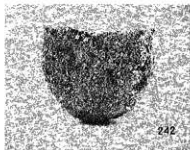
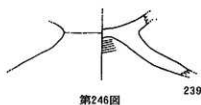
236 (第243図) は碗で、口径は4.3cm、器高は3.5cm、底径は2.8cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。底部は成形後まだ粘土の乾かないときに上から力を加えたと思われ、少しつぶれている。内面は指ナデで、口縁部はつまみあげている。底部は指オサエである。

237 (第244図) は高杯の坏部と思われる。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、器面荒れのため判別しにくいですが、内外面ともにナデと思われる。

238 (第245図) は壺の口縁部で、復元口径は11.7cm、残存器高は2.3cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデである。内面は口縁部は指ナデで、頸部は指オサエである。

239 (第246図) は壺と思われる。色調外面は黄褐色で、一部明黄褐色である。内面は黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくいですが、ナデと思われる。内面も器面荒れのため判別しにくいですがナデと思われ、一部にハケ目が残っている。

240 (第247図) は壺の底部と思われ、残存器高は3.1cm、底径は4.4cmを測る。色調外面は褐色で、一部黄褐色である。内面は褐色である。胎土は角閃石・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は下から上



へ引き上げるような指ナデである。

241 (第248図) は埴で、復元口径は 3.4cm、器高は 2.2cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデである。内面は指オサエで、1ヶ所下から上へ粘土を引き上げたようなナデが残っている。また口縁部は外と内を軽くつまんでつっけている。



第251図 244

242 (第249図) は臺と思われ、口径は 3.6 cm、器高は 3.2 cm を測る。色調外面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は指オサエ後下から上へ引き上げるような指ナデである。口縁部は外と内をつまむようにして稜を作り出している。



第252図 245

243 (第250図) は埴で、口径は 2.4 cm、器高は 2.5 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、指オサエ後ナデと思われる。内面は指オサエで、口縁部はナデである。



第253図 246

244 (第251図) は高坏脚部で、残存器高は 2.3 cm、底径は 10.6 cm を測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともにナデである。



第254図 247

245 (第252図) は器種は不明であるが、残存器高は 1.7 cm、底径は 4.6 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに器面の剥落が激しく、不明である。



第255図 248

246 (第253図) は臺の底部で、残存器高は 2.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は角閃石・白色粒・石英を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指ナデで、内面は指ナデ、一部指オサエである。

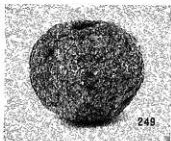


248

247 (第254図) は埴で、復元口径は 2.9 cm、器高は 2.7 cm を測る。色調外面は灰褐色で、一部黄褐色である。内面は灰褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は横方向への指ナデで、一部指オサエを施している。内面は指オサエである。



第256図 249

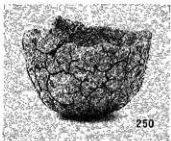


248

248 (第255図) は埴で、残存器高は 3.1 cm、底径は 2.0 cm を測る。色調外面は淡黄褐色で、一部褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・長石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため判別しにくい、ナデと思われる。



第257図 250



250

る。内面も判別しにくい指オサエ後指ナデと思われる。

249 (第256図) は壺で、残存器高は 4.0 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は石英・白色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は頸部の径が狭く、見えないため不明である。

250 (第257図) は埴で、残存器高は 3.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は、下から上へ引き上げるような指ナデである。

251 (第258図) は鉢で、復元径は 3.3 cm、残存器高は 2.6 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は赤褐色粒・白色粒・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。内外面ともに指オサエ後ナデで、口縁部はつまみあげている。

252 (第259図) は埴で、残存器高は 2.0 cm、底径は 2.2 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、底部は平坦に作っている。内面は指オサエ後一部下から上へ引きあがるような指ナデで、一部に粘土を強く引き上げた際盛り上がった粘土を押しえた痕がある。

253 (第260図) は鉢と思われる。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部が指オサエで、上半部から下半部にかけて指オサエ後ナデである。内面は口縁部が指オサエで、上半部から下半部にかけて指ナデである。

254 (第261図) は埴で、残存器高は 2.2 cm を測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は下から上へ引き上げたような指ナデである。全体的に成形時の指オサエが強く残っている。

255 (第262図) は壺で、残存器高は 3.0 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部暗黄褐色と暗褐色である。内面は淡黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は下から上へ引き上げるような指ナデで、口縁部はナデている。底部は指オサエである。

256 (第263図) は埴で、口径は 3.6 cm、器高は 3.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色と黒灰色である。また、スス付着が見られる。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色と黒灰色である。また、スス付着が見られる。胎土は角閃石・雲母・白色粒を含んでいる。焼成は不良である。調整方法は、外面は指ナデで、一部指オサエである。内面は下から上へ粘土を引き上げた指ナデである。全体的に成形時の指オサエの痕が強く残っている。



第258図



第259図



第260図



第261図



256

第262図



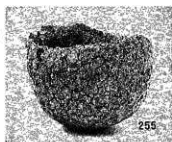
257

第263図

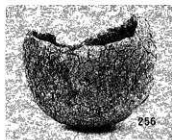


258

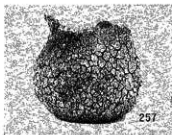
第264図



255

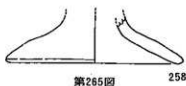


256



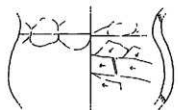
257

257 (第264図) は壺で、復元口径は 5.0 cm、器高は 5.8 cm、底径は 3.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部暗褐色、黒褐色である。また黒斑がある。内面は暗褐色で、一部暗黄褐色である。胎土は白色粒・角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は口縁部から頸部にかけてはナデで、体部は指オサエ後ナデ、底部はナデである。一部底部と体部の境に指頭圧痕が強く残っている。内面は口縁部がナデで、頸部は指オサエ後ナデ、下半部は下から上へ引き上げるような指ナデである。



第265図 258

258 (第265図) は高坏脚部で、残存器高は 2.0 cm、底径は 9.4 cm を測る。色調外面は明黄褐色で、一部暗褐色である。内面は暗褐色で、一部黄褐色と黄褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともにナデである。



第266図 259

259 (第266図) は壺である。色調外面は淡黄褐色で、一部赤褐色である。内面は赤褐色で、一部淡黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は頸部が指オサエで、上半部から下半部は指オサエ後ナデか工具ナデがみられる。しかし器面の剥落が激しく、外面の工具ナデは判別しがたい。内面は、口縁部に指オサエか工具ナデがみられる。上半部から下半部にかけては、工具ナデが見られる。



第267図

260 (第267図) は壺で、残存器高は 3.2 cm を測る。色調外面は黄褐色で、一部黄褐色、褐色である。内面は黄褐色である。胎土は石英・雲母・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面、頸部は指オサエで、上半部から底部にかけては指オサエ後ナデがみられる。内面、頸部は指オサエで、上半部から底部にかけては指オサエ後指ナデである。



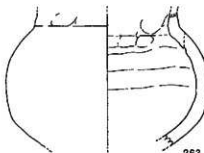
第268図

261 (第268図) は埴で、復元口径は 3.4 cm、器高は 3.2 cm を測る。色調外面は褐色で、一部暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともにナデである。



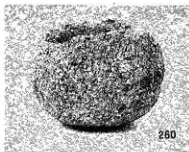
第269図

262 (第269図) は埴で、復元口径は 4.0 cm、器高は 3.5 cm を測る。色調外面は暗黄褐色で、一部褐色である。内面は暗黄褐色で、一部暗褐色である。胎土は雲母・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は口縁部が指オサエで、体部は指オサエ後指ナデである。

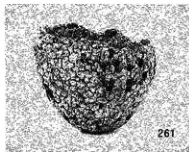


第270図

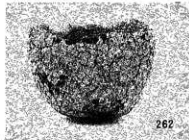
263 (第270図) は壺である。



260



261



262

色調外面は黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は雲母・角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面、口縁部は指オサエで、上半部から下半部にかけては指オサエ後ナデである。内面は口縁部と頸部の境にみられる粘土紐の接合痕は指オサエ後ナデを施しており、上半部から下半部にかけては指ナデである。



第271図

264

264 (第271図) は盃である。色調外面は淡黄褐色である。内面は淡黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は雲母・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに、工具ナデかハケ目調整である。頸部には、粘土の接合痕がある。



第272図

265

265 (第272図) は鉢で、復元口径は 3.2 cm、器高は 2.0 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。

調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁をつまみあげた際の指圧痕が強く残っている。内面は指オサエ後指を横方向に回転させたようなナデである。



第273図

266

266 (第273図) は器種は不明であるが、残存器高は 1.3 cm、底径は 2.8 cm を測る。色調外面は明黄褐色である。また、ススの付着が見られる。内面は明黄褐色である。胎土は赤褐色粒・雲母を含んでいる。焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、底部は平坦に作っている。内面体部は指オサエで、底部はえぐるようにナデている。



第274図

267

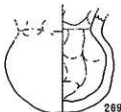
267 (第274図) は器種は不明であるが、残存器高は 1.5 cm、底径は 2.3 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、底部は下に押し付けてように平坦に作っている。内面は指ナデである。



第275図

268

268 (第275図) は鉢で、復元口径は 3.5 cm、器高は 2.4 cm を測る。色調外面は褐色で、一部暗黄褐色である。内面は明褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデである。内面は指オサエ後、指を横方向に回転させたようなナデであるが、指オサエの痕が強く残っている。口縁部は内と外を軽くつまんで發をつくりだしている。



第276図

269

269 (第276図) は盃で、残存器高は 4.8 cm を測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部褐色である。胎土は石英・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は頸部に粘土紐の接合痕があり、そ



第277図

270

の部分を上からおさえるように指オサエ、また上半部から底部にかけては指オサエ後ナデと思われるが、器面荒れが激しく判別しがたい。内面は口縁部につまんだような指オサエで、上半部から底部にかけては指ナデ、底部中心には粘土接合痕がある。肩部は内から外に指で押すようにして、稜を作り出している。



第278図

270 (第277図)は残存器高、3.6 cmを測る。色調外面は明黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は黄褐色で、一部黒褐色である。胎土は雲母・角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部付近に何らかの工具があたったような痕がある。内面はナデで、底部は指オサエ後ナデで平坦に作っている。



第279図

271 (第278図)は器種は不明であるが、残存器高は2.4 cm、底径は4.0 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は指オサエで成形した後、不定方向にナデている。



第280図

272 (第279図)は壺の底部と思われ、残存器高は2.3 cm、底径は3.5 cmを測る。色調外面は明黄褐色で、一部黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、一部には粘土の接合痕が残っている。また底部は平坦に作っている。内面は指ナデ後一部指オサエである。器形のゆがみが大きい。

273 (第280図)は鉢で、口径は4.7 cm、器高は3.3 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。胎土は角閃石・長石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、口縁部はつまみあげている。内面は指オサエ後ナデである。



第281図

274 (第281図)は碗で、口径は3.4 cm、器高は2.9 ~ 3.4 cm、底径は1.6 cmを測る。色調外面は暗褐色で、一部黄褐色である。内面は暗褐色で、一部明黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は不定方向の指ナデで、口縁部はつまみあげている。また、底部はナデている。内面は指オサエ後ナデである。器形のゆがみが大きい。全体的に、成形時の指圧痕が強く残っている。



第282図

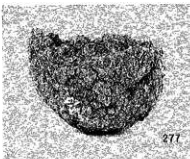
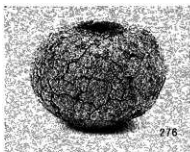
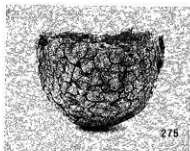


第283図

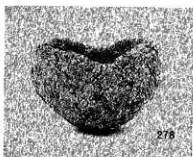
275 (第282図)は碗で、口径は3.2 cm、器高は2.9 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は暗黄褐色である。また、ススの付着が見られる。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面はナデで、何所らかの工具によるミガキ風の擦過痕が残っている。内面は指オサエ後ナデである。全体的に成形時の指圧痕が残っている。



第284図



276 (第283図)は壺で、残存器高は2.8 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、内面は口径が狭いため内部の観察ができて不明である。



277 (第284図)は埴で、残存器高は2.2 cmを測る。色調外面は淡黄褐色である。内面は暗黄褐色で、スス付着が見られる。胎土は長石・角閃石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れの為判別しにくい指オサエと思われる。また一部に粘土の接合痕が残っている。内面は指ナデで、一部に器壁のゆがむような指圧痕がある。これは成形後土器をつまんで移動させた際のものと考えられる。



278 (第285図)は埴で、口径は2.6 cm、器高は2.0 cmを測る。色調外面は暗黄褐色で、一部黄褐色である。内面は暗黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに指オサエ後ナデと思われる。内面は成形時の指オサエが強く残っている。

第286図

第287図

279 (第286図)は鉢で、口径は3.8 cm、器高は2.4 cmを測る。色調外面は明黄褐色で、一部暗黄褐色である。内面は明黄褐色である。胎土は角閃石・赤褐色粒・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は器面荒れのため不明であるが、口縁部はつまみあげたのか、かすかに指圧痕が残っている。内面は、指オサエの痕がわずかに残っている。



280 (第287図)は埴で、口径は3.1 cm、器高は2.0 cmを測る。色調外面は黄褐色である。内面は黄褐色で、一部明黄褐色である。胎土は角閃石・白色粒を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともに指オサエ後ナデで、内面側部は指を横方向に回転させたようなナデである。



281 (第288図)は埴で、口径は2.4 cm、器高は2.2 cmを測る。色調外面は明褐色で、一部褐色である。内面は褐色で、一部明褐色である。胎土は角閃石・雲母を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、外面は指オサエ後ナデで、底部に粘土の接合痕が残っている。内面は指オサエである。

282 (第289図)は蓋と思われるが、器高は1.2 cmを測る。色調外面は暗黄褐色である。内面は黄褐色である。胎土は角閃石・長石を含んでいる。また、焼成は不良である。調整方法は、内外面ともにナデている。底部は、下に押し付けたように平らである。



遺構全景



遺物出土状況



遺物出土状況

第3章 ま と め

瑞雲遺跡では巨石のあいだ等から、数は多くはないが、いくつかの土器を確認することができた。時代は8世紀末から江戸時代までと幅が広い。特に堯は巨石と巨石の間の1m程の空間に、ばら撒いたように散布していた。他の土器は巨石のすぐそばで確認されている。この遺跡の特筆すべき点として、磐座の人為的な築造が挙げられる。全体を確認できたわけではないがトレンチによる確認で、巨石の下に人為的に石を据え、上の石の上部を平行に保つような作為を加えたり、土層による確認で巨石の周辺に掘り込みが見られたり等、明らかに人による手加えられていることが、確認された。磐座は現在に至るまで、信仰の対象となっていることが多く、発掘調査の対象となった例をほとんど知らないが、普通、磐座は自然にある石を利用したものが多く、瑞雲遺跡のように遺跡の周辺には他に巨石がなく、また池の周囲に作為的に築造したものは極めて珍しいものと思われる。

成恒供原遺跡では、実測可能土器数282点の土器が出土した。出土した土器の内訳であるが、壺が121点、これは全体の43%にあたる。埴が81点、これは全体の29%にあたる。高坏は17点、これは全体の6%にあたる。甕は9点、これは全体の3%にあたる。鉢は12点、これは全体の4%にあたる。蓋が3点、これは全体の1%にあたる。また器種が不明のものは39点を数え、全体の14%になる。これらの多くは非日常容器の様相をもつ小型の土器、またはミニチュア土器であった。出土した土器の口縁部の特徴などから、これらの土器は4世紀後半から5世紀初頭のものと考えられる。出土した土器はいずれも焼成が悪く脆いもので、触ると表面が剥離していくものが目立った。また内外面に粘土紐の痕跡をそのまま残したものや、指の跡が残ったものなど調整の雑なものが多かった。

今回調査が行われた遺跡は、二ヶ所とも成恒小池の周辺で確認されたものである。成恒小池は古くから成恒地区を中心とした多くの水田に供給する水を蓄えた池である。この周辺は大きな川がなく、農業用水の多くは溜池に頼っている。三光村の南側にある八面山は水に対する信仰のシンボルであり、隣の中津市にある薦神社の奥の院といわれている。薦神社は水の神様であり池が内宮、社殿が外宮となっている。現在は道路建設や宅地化等でその一部が埋め立てられているが、以前は八面山のふもとから転々と池や水路が造られ、薦神社までつながっていたといわれている。現在その水路の一部は原口地区に残っている。

今回の調査は成恒小池の周辺に限ったものであったが、三光村にはこの他にも多くの池があり、水や池に対する信仰の痕跡を各地で見ることができ、今後これらの信仰遺跡を調査することにより、三光村での水に対する信仰やまた農業形態等もわかってくるのではないかとと思われる。

報告書抄録

ふりがな	さんこうむらのいせき						
書名	三光村の遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三光村文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1集						
編著者名	平田由美						
編集機関	三光村教育委員会						
所在地	大分県下毛郡三光村大字成恒439番地						
発行年月日	2003年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査面積	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'″	°'″	調査期間	調査原因
瑞雲遺跡	下毛郡三光村 大字成恒					1996.7～ 1996.11 2002.5～ 2002.10	30㎡ 保育園 建設
成恒笹原遺跡	下毛郡三光村 大字成恒					1994.8～ 1995.2	100㎡ 総合グラ ンド建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
瑞雲遺跡	磐座	8世紀末～ 13世紀	磐座	壺・小皿・埴・壺等			
成恒笹原遺跡	祭祀 土坑	4世紀末～ 5世紀	土坑1基	ミニチュア土器			

三光村の遺跡

2003年3月

発行／三光村教育委員会
(下毛郡三光村大字成恒)

印刷／昭和堂印刷
